

平成28年度

学位論文

「家庭教育」という言葉に内包される規範性と戦略性

— 各種メディアからの分析 —

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科

人間発達教育専攻 教育コミュニケーションコース

M14016F

小林 文英

目 次

序 章

第1節	研究の目的	p.1
第2節	問題の所在	p.1
第3節	研究の方法	p.2
第4節	本稿の構成	p.3

第1章 「家庭教育」という言葉について

第1節	「家庭教育」の“登場”	p.4
第2節	「家庭教育」の“変遷”	p.5
第3節	「家庭教育」の“諸問題”	p.8
第4節	本章のまとめ	p.9

第2章 各種メディアからの分析

第1節	「家庭教育」と「メディア」の関係について	p.11
第2節	新聞投書欄にみる特徴	p.13
第3節	書籍通販にみる特徴	p.15
第4節	Q&Aサイトにみる特徴	p.16
第5節	テレビ番組にみる特徴	p.18
第6節	家庭教育雑誌にみる特徴	p.19
第7節	公立図書館にみる特徴	p.21
第8節	中教審答申にみる特徴	p.22
第9節	本章のまとめ	p.23

第3章 「家庭教育」に随伴するテキストからみた各種メディアの相関

第1節	数量化理論Ⅲ類の利用について	p.25
第2節	数量化理論Ⅲ類による分析	p.26
第3節	分析結果からの考察	p.31
第4節	本章のまとめ	p.34

終 章 「家庭教育」という言葉の多義性

p.35

注	p.38
引用参考文献	p.39
参考資料一覧	p.43
謝辞	p.50

序 章

第1節 研究の目的

本稿における研究の目的は、①「家庭教育」という言葉のもつ多義性の存在を明るみに出すことである。そして、②メディアによる、「家庭教育」という言葉に対する意味内容の捉え方の違いを明るみに出すとともに分類することである。

親や子がそれぞれに家庭をつくっていて、それぞれに自分たちの家庭や親や子のあり方が「正しい」と考えていることから、「家庭教育の本質は、怖くて手を触れる気がしない。」（諏訪2007,p.151）との語りがある。もちろん、そのとおりである。しかし、「家庭教育は情報に動かされやすい局面がある」（諏訪2007,p. 156）との語りもある。ここに、「家庭教育」という言葉のもつ諸概念を明確にすることの意義が見出されると考える。そこで、上記の2点を本研究の目的とした。

第2節 問題の所在

近年、「いじめ」「不登校」「学級崩壊」など数多くの教育問題が、その解決の糸口を見つけれないまま存在している。それらの問題に対する論評が、家庭や親の責任をその多寡にかかわらず指摘していないことは稀である。そしてまた、「家庭教育」の重要性を語らない論者はいないことも確かである。

2006年、教育基本法が改正され、「家庭教育」という条項が独立した形で新設された。その内容には、旧基本法に比べて「国民の態度や姿勢・意識を直接規制するような含意を顕著に看取することができる」（山本正身 2014,p.418）との指摘もあるが、そこには「家庭教育」への“関心”と“期待”が表れている。しかし、“関心”は、時に家庭に対する“責任”へと姿を変え、“期待”は、往々にして“重圧”へとその姿を変える。周知の事実であるが、教育機能の「強い家庭」と「弱い家庭」が存在し、教育アスピレーション（意欲）の「高い家庭」と「低い家庭」が存在する。親世代から子世代へと社会内での有利さ・不利さを橋渡しする機能としての「家庭教育」が本田（2008）により指摘されている。そして、教育選抜においては「メリトクラシー」から「ペアレントクラシー」へと移行しているとの耳塚（2014）の指摘もある。そこに「家庭教育」のアボリア（難問）があるといえる。

親が「子供のジェネラル・マネージャー」（広田 1999,p.181）となった今、「親の体験や考えより『外部情報』、家庭の毎日の暮らしの中で培い身につけるものよりその時々の『最新情報』を重視する親子の時代が始まった」（岩村 2005,p.282）ともされる。ところが、そんな中で、「家庭教育に対する問題意識は明確に社会に存在しているわけだが、家庭教育は簡単に把握することができない。」（千葉 2014,p.50）ともいわれる。

近代日本に、「家庭教育」という言葉が登場してから今日に至るまで、いや、至ってまあ、その意味は様々な変転を繰り返しながら当該概念を明確にしないままでありつづけているのではないだろうか。「家庭教育は、家庭と教育という二つの熟語で成立している。家庭の語が近代社会の成立の中で一般化してきたのであり、断わるまでもなく、家庭教育もその意味で近代の概念である。」(中畠 1995,p.18) その近代の概念であるところの「家庭教育」という言葉に注視したい。神原 (2010) は「家庭教育」の意味が明確にされないまま今日にいたっている、と論考し、倉橋惣三の研究を通して山本 (2012) は、「家庭教育」という言葉が案外考えられずにきた、と論述している。また、「諸事典による規定は必ずしも論旨明快とはいえない。」(小野 2010,p.132) との指摘もある。

さまざまな情報を伝達する媒体、それはメディアである。しかし、そのすべてのメディア (=新聞、テレビ、ウェブサイトなど) が「家庭教育」という言葉の意味内容 (概念) を「同じもの」として捉えているのか。もしかすると、そこに違いがあるのではないか。もし、違いがあるとすれば、その違いを分析することで、「家庭教育」という言葉のもつ諸概念を、僅かなりとも明確にすることができるのではないか。これが本研究のスタートであり、研究の目的へと繋がる問いかけである。

以上のことから、①「家庭教育」に対する「関心」や“期待”はあるが、「家庭教育」という言葉そのものの意味が多義的であり不明確ではないか。②「家庭教育」は情報によりさまざまな形で影響を受けるものであるが、メディアによって「家庭教育」という言葉に対する意味合いに違いがあり、その違いを分析することが必要ではないか。という2点を問題の所在とした。

第3節 研究の方法

「家庭教育」に関する研究の傾向は、以下の2点が主なものである。1つは、社会階層 (再生産) などからのアプローチ、もう1つは、親 (または子) の意識からのアプローチ、である。勿論、それ以外の研究アプローチもあるが、「家庭教育」という言葉そのものについて、その意味するところを分析するといった研究は稀である。さらに、上記2点の研究アプローチ以外の例として次にあげる。(あくまでも例であり、他にも多々ある。)

天童 (2013) による育児メディアの変遷から家族の教育戦略に迫るもの、同じく天童・高橋 (2011) による雑誌言説から子育て期家族のジェンダー体制に迫るもの、また、小玉 (2010) による臨教審・中教審に登場するキーワードから教育と家族に迫るもの、などの家族社会学の研究がある。また、教育史からみた研究として、奥村 (2009) による明治の家庭教育振興政策から家庭教育の役割に迫るもの、教育政策の面からみた研究として、広井 (2009a) による家族政策における親の教育責任と経済的負担の増大への問題点に迫るもの、などである。

また、「家庭教育」についての内実にせまる研究としては、広田 (1999) の歴史的考察に

よる論証や、本田（2008）のインタビュー調査などの駆使による「家庭教育」を背負う母親の実態を示したものの、などがある。

ともあれ、「社会階層（再生産）などからのアプローチ」ではなく、また「親（または子）の意識からのアプローチ」ではない、言説分析として「家庭教育」という言葉そのものを取り上げた研究はない。（「家庭の教育力の低下」という教育言説についての研究などはあるが）

そこで、本研究の方法であるが、まず、各種メディアのそれぞれについて、その「場⁽¹⁾」（＝それぞれのメディア）において「家庭教育」という言葉とともに表出⁽²⁾される「テキスト」（「家庭教育」という言葉に随伴して現れる語）を抽出し、テキストマイニング⁽³⁾により、それぞれのメディアにおける特徴をおさえる。そしてその後、複数のメディアに現れる語をもとに、数量化理論Ⅲ類⁽⁴⁾を利用しそれらを散布図にあらわす。その結果をもとにクラスター分析を利用し類型化する。

第4節 本稿の構成

本研究では、「家庭教育」という言葉そのものにフォーカスし、その諸概念を考察する意味から以下の構成により論考をすすめたい。

まず、第1章では、近代の概念である「家庭教育」という言葉の「登場」に着目し、その「変遷」を辿りながら、意味内容の移り変わりをおさえる。そして、言葉に注視しながら、現代における「家庭教育」を取り巻く「諸問題」を確認するとともに、「家庭教育」という言葉について、マクロ的な視点から諸研究を参考にまとめる。

第2章では、「家庭教育」と「メディア」の関係について考察した上で、「新聞投書欄」、「書籍通販」、「Q&Aサイト」、「テレビ番組」、「家庭教育雑誌」、「公立図書館」、「中教審答申」のそれぞれにおける特徴を明らかにする。

第3章では、第2章の結果をもとに、「家庭教育」という言葉に対する各種メディアの相関関係を分析する。そして、結果の考察により研究の目的であるところの「家庭教育」という言葉の諸概念を明確にするとともに類型化を試みる。

最後に、終章において本稿の知見をまとめるとともに今後の課題を示す。

以上が本稿の構成である。フーコー（1969）が『知の考古学』で「言説を分析するとは、諸矛盾を消え去らせ、再び出現させることである」（Foucault 1969,p.230）と語り、ポランニー（1966）が『暗黙知の次元』で「諸細目を注視することは、それだけでは意味の破壊を招くかもしれないが、しかしそれはその後の統合を導く手びきとなり、こうして、より確実に正確な意味が確立される」（Polanyi 1966,p.37）と語ったことを本研究の指針として考察を深めていきたい。

第1章「家庭教育」という言葉について

第1節「家庭教育」の“登場”

「おそらくは福沢諭吉が1876（明治9）年頃に英語のhome education に相当する訳語として」（山本敏子2014,p.65）、漢籍にあった「家庭」と「教育」とを合成して「家庭教育」という言葉を作ったものと考えられている。福沢諭吉は「家庭習慣の教を論ず」と題して、『家庭叢談』⁽⁴⁾に論考を載せている。明治啓蒙思想家として「家庭教育」の重要性を説いている。その一部は以下の通りである。

習慣は第二の天性を成すといひ、幼稚の性質は百歳までともいう程のことにて、真に人の賢不肖は、父母家庭の教育次第なりというも可なり。家庭の教育、謹むべきなり。然るに今、この大切な仕事を引受けたる世間の父母を見るに、かつて子を家庭に教育するの道を稽古したることなく、甚だしきは家庭教育の大切なことだに知らずして甚だ容易なるものと心得、毎に心の向き次第、その時その時の出任せにて所置するもの多きが如し。⁽⁵⁾

ここには、「父母への啓蒙」が記され、「家庭を教育する」という福沢の強い姿勢が現れている。しかし、そこでの内容は家庭における「習慣」に対しての指摘が中心であり、「家庭教育」そのものについての言及はない。

沢山（2013）は、明治期に生まれた言葉としての「家庭教育」の定義が初めて登場するのは、1882年の文部省示諭のなかにおいてであるとしている。その一部は以下の通りである。

学齡児童ヲ学校ニ入レス又巡回授業ニ依ラスシテ別ニ普通教育ヲ授クルモノヲ総称シテ家庭教育ト云フ⁽⁶⁾

ここでの「家庭教育」は、家族が学校の代理として行う教育とされた。そして、続けて、「是レ即チ学校教育ニ対スルノ称ニシテ必シモ一家団欒ノ間ニ行フ所ノ教育ヲ指スニ限ラザルナリ」とあり、武田（1992）は「学校教育」と「家庭教育」の「利害損得」を論じているとしている。また、桜井（2005）は公教育制度ができたことにより家庭教育が登場したとし、「家庭教育とは、学校という領域が明確になって以降、学校教育との分業・協業関係をはっきりさせるために創り出された領域的な概念と考えられる」（桜井 2005,p.95）としている。

「家庭教育」という言葉は、その登場の段階から、「家庭の習慣に対するもの」とであると同時に、「学校での教育を代理し補うもの」という、二面性をもってはじまったといえる。

いいかえれば、「生活習慣」と「家庭学習」が、「徳育（≡しつけ）」と「知育（≡学力）」のそれぞれがともに「家庭教育」という言葉の中に埋め込まれた状態で萌芽したといえる。明治期の家庭教育論の研究から、小山（2002）は知育と徳育という教育の相補性を指摘し、主に、学校教育が知育を、家庭教育が徳育を行うというもの⁽⁷⁾であったとしている。

また、ここでは、「家庭教育」の捉え方が、「雑誌」によるものと、官制の「文書」によるものとで、すでに違いがあることにも注視したい。

第2節「家庭教育」の“変遷”

「家庭教育」という言葉に注目しながら、その誕生以前、明治期から大正期、昭和前期から戦中、そして戦後から現代までを概観しておきたい。

（誕生以前）

平安時代の庶民の子育てを、文字に書かれた当時の資料から検討することは困難であるが、柴崎（1999）は12世紀に描かれた資料（絵図など）にあたり、ほとんどの場面で大人の女性（母親または老女、祖母）が子守りをしていた、としている。また、鎌倉時代の武士階級の子育ては、貴族階級と同じくすべて乳母に任せていたとされる。そして、江戸時代には、父親であっても子どもの成長の程度に強い関心があり、武士階層、町人階層、そして富農層においても同じであったとされ、その時の「父に期待される徳目には『義』『慈』『厳』『尊』がある」（小泉2009, p.95）とされる。

「巨大都市江戸の読み書きを担ったのは市中に乱立した寺子屋・私塾であった。」（高橋2007, p.56）とされ、「表店（おもてだな）から裏長屋まで一家を構えた家族にとって子どもの教育は重大な関心事」（高橋2007, p.56）となり、「生き馬の目を抜く江戸で生き抜くためには、読み書き算用を身につけておくのが有利であることを親たちは身に染みて思い知らされていた。」（高橋2007, p.57）とされる。そして、「寺子屋では『よみ・かき・そろばん』の能力だけでなく、あるべき人間のありよう（倫理）も教えるものであった」（布川1996, p.59）とされ、「親は子どもが少し大きくなると、家業を少しずつ教えた。家業こそが子どもが生きていくための基本であり、農民なら農作業、商人なら商売の学習が不可欠だったからである」（布川1996, p.61）とされる。

また、「近世の村の女たちは、小家族化したとはいえ、食住未分化で夫とともに子育てに向き合った上、寿命は短いが三世代家族でしばしば年寄りが同居しており、さらには共同体の嫁仲間によって耳から入る情報を得やすく、良くも悪くも見守る地域社会の目を意識できる環境で子育てをしていた」（太田2011, p.27）といわれる。そして、「近世期の武家や上層の町人を主な読者層として急速に増え始める子育て書は、幼児教育の基本の遊びの指導ではなく、日常生活のしつけにおいていた。」（太田2011, p.47）とされ、「江戸期の子育て論に共通しているのは、子への溺愛が批判され、教えの大切さが説かれていることである。」

(中江2003,p.144)とされている。

山本正身(2014)は、江戸時代後期以後の「教育爆発」が、明治期の急速な「国民皆教育」を可能にする社会的条件を形成したことはいうまでもないとしたうえで、「そうした江戸の教育組織は、元来、後世の近代教育を準備するために存在したわけではなく、江戸社会における諸々の教育的要求への応答として存在した」(山本正身2014,p.43)としている。

(明治期から大正期)

「明治以前の親の養育を教育と呼ぶのであれば、〈教育が親の手から離れて学校へ移っていった〉のは教育の当然でも、明治政府の善意でもない。明治政府は善意で親の教育権を肩代わりしてやったのではなく、親や地域から一方的に取り上げたのである。」(諏訪2007,p.164)とされる。そして、その理由は「教育を親や地域の生活・文化・習俗・信仰から離陸させなければ、近代的国民が形成できないと考えたからである。」(諏訪2007,p.164)とされ、「親や地域が子どもを教育してきた力を弱めて、国家が学校において子どもの教育を独占しようとした。」(諏訪2007,p.165)といわれる。

「家庭教育」という言葉が誕生した1870年代^⑧に、中村正直によって「良妻賢母」という言葉がつけられた。そして「女子教育においては、他家へ嫁する以外に道がなく、家政・従順・勤儉が男子に比し重視され、それを育成すべく、技術教育や躾教育が行われ、良妻賢母主義教育に組み込まれて、一般の家庭教育に徹底化」(中畠1996,p.105)されていたとされる。

1893(明治26)年7月の文部省訓令が「家庭教育」に言及し女子教育の振興を訓じたことを一つのきっかけとして、外国の家庭教育論の紹介が始まり、明治30年代に入ると日本の教育学者・心理学者による家庭教育論も多く見られるようになった。明治30年代にはまた、子供を焦点とした『児童研究』(1899年,明治32年)・『婦人と子ども』(1901年,明治34年)などの教育雑誌が創刊され、家庭において子供がとくに母親によって十分な教育的配慮が払われるべきことが強調された(牟田1996)。また、「明治20年代後半、とりわけ30年代に入ると、翻訳書を含めて、家庭教育という言葉タイトルに含んだ様々な書物が出版」(小山1999,p.31)されている。

1900年代には、「都市はもちろんであるが、農村にあっても階層分化がすすみ、豊かな農民の家庭では、学校教育以外に、家で本やドリルを子供に与え、補助教育を施すような現象も登場し、中等教育や高等教育への進学を価値とする文化も一般化していった。」(尾崎1999,p.72)

そして、大正期には「都市の新中間階級(役人や会社員)が、わが子を意図的な教育の対象と見なすようになったと考えられ」(諏訪2007,p.177)た。これは教育学的に「教育する家族」^⑨と呼ばれている。また、「1920年代の新中間層の家族にとって、子どもに高い学歴を与えることは、一種の『家業の継承』を意味した。近代的被用者であった彼らにとって、子どもの学歴達成は親の社会的地位が継承されることを意味したからである。」

(岡本2004,p.214)ともいわれる。

(昭和前期から戦中)

「両親再教育」なる言葉が、1920年代の後半を迎えて登場した。それは「子どもを育て、教育するためには親が再び教育されなければならない時期の到来を予見」(木村1990,p.178)させるものとされている。そして、1930(昭和5)年、家庭教育振興ニ関スル件(文部省訓令18)が出され、そこでは「国運ノ隆替風教ノ振否ハ固ヨリ学校教育並社会教育ニ負フ所大ナリト雖之力根帯ヲナスモノハ実ニ家庭教育タリ」⁽¹⁰⁾としている。このことについては、「家庭教育の役割を無視して学校教育をもって教育のすべてであるかのようにしてきたことへの文部省による自己批判を含むかたちで家庭教育振興を求め、家庭教育を学校教育に準ずる重要な教育領域へ位置づけを高める必要性を示唆する訓令であった。」(奥村2009,p.30)とされる。そして、「戦前期に入ると、総力戦を支えるために家族制度を中心としたイデオロギー注入の手段として家庭教育は一層重視され、さまざまな戦時家庭教育施策が展開」(伊藤2002,p.53)される。

また、国民学校令発令(1941年)により、家庭教育が学校教育の一環として国民学校の目的である「皇国民練成」の実施組織に位置づけられ、「1940年代の政策方針は、家庭教育を重視しつつも、『練成』を担う学校教育を補完、補強するものへと家庭教育の位置づけをさらに変えていった」(奥村2009,p.30)とされている。

(戦後から現代)

「戦後、とりわけ1960年代に表れた『家庭教育ブーム』以降の日本では、『教育の権利』というのは、主に『わが子』の教育の充実のために使われてきた。」(桜井2012,p.156)とされ、今の働き方のベースについても、家庭教育ブームの成立と同様に、高度経済成長期に確立したとして、「1970年代に2つの造語ができた。『企業戦士』と『教育ママ』。これらは雑誌から生まれた言葉」(桜井2012,p.169)であることが指摘されている。広田(2003)は、「教育ママ」という言葉が昭和40年前後に大流行したが、50年代に入るとどの母親も多かれ少なかれ「教育ママ」のような熱心さで子育て・家庭教育をするようになったとし、「ここ30年間の時期は、日本社会の長い歴史の中で、親がわが子に教育的な視線を最も注いでいる時代である」(広田2003,p.55)ことを指摘している。

また、「戦後の日本は、1950～70年代を通じて、大衆教育社会と呼びうる社会をつくりあげてきた。」(荻谷1995,p.199)とされ、「高度経済成長に伴って教育が量的に拡大し、高校等への進学率が9割を突破した70年代半ばに、日本では『大衆教育社会』が完成した。」(藤田2014,p.228)とされる。そして、「大衆教育社会は、形式的な平等を追い求める一方で、社会階層間の格差がもたらす不平等の問題を不問に付してきた。」(藤田2014,p.229)とも指摘される。

「80年代の臨教審において、教育政策の基本に家庭が明示的に位置づけられた」(小玉

2010,p.158) とする小玉 (2010) は、1986年の第二次答申で「家庭の教育機能」にかえて「家庭の教育力」という言葉をキーワードとして登場させた点を、その象徴としている。

「1990年代の低成長の時代に入ると、1980年代まで続いた学校と仕事の間断ない安定した接続関係が不確実なものになった。」(木村2015,p.134) とされ、「教育より生活を優先せざるを得ない層と、過剰に教育熱心な層の二つの層の存在と、結果として次第に循環社会から脱落していく層の増加によって、戦後日本型循環モデルが機能不全に陥っていった」(木村2015,p.134) と指摘されている。また、本田 (2008) によると「家庭教育」が政策的に強調せれるようになったのは1990年代後半であり、こうした政策動向の背後には90年代以降の新自由主義イデオロギーがあるとする。同時期に、政策動向とは別の観点で「家庭教育」のハウツーを語るメディア (雑誌記事・新聞記事など) の増加がみられ、ここでは自分の子どもと他人の子どもとの差異化を強調しているとする梅景 (2007) の論考を石川 (2011) は紹介している。そして、2005年から2006年にかけて、「日常生活習慣から受験対応まで、さまざまな家庭の教育戦略のノウハウを前面に押し出した新しいタイプの教育情報誌のあいつぐ創刊が、話題とな」(梅景2010,p.168) ったとされている。

本田ら (2006) では、「週刊誌などの雑誌では、(社会階層ではなく家庭教育の問題としての)『ニートが生み出される家庭』とか『自分の子供をニートにしない子育て』などといった特集が組まれるようになっていく」(本田2006,p.223) ことをあげ、それらの原因が本人の心理状態や親の甘やかしの問題に矮小化されてしまっていることを指摘している。

第3節「家庭教育」の“諸問題”

昨今の「学力向上」ないしは中学受験ブームのポイントを成すものとして、諏訪 (2007) は「わが子の学力を育てるのは家庭である」(諏訪2007,p.35) とされる点をあげ、「教育の私事化」現象を指摘している。そして、教育は公的な事項ではなく、個人やその家族に関わる「私」的事項であると受け取られるようになると、教育の私事化はさらに進んでいくことを指摘している。また、千葉 (2014) は、「ペアレントクラシー」と「家庭の教育力低下」という2つの事象から家庭教育が成立するための条件に迫るなかで「家庭教育に対する問題意識は明確に社会に存在しているわけだが、家庭教育は簡単に把握することができない。(略) 学校や社会も家族に対する向き合い方を打ち出すことができないでいるように思われる」(千葉2014,p.50) と述べている。そして、「ペアレントクラシー」からは、学校で行われる教育内容の習得に価値を置く学校に適応的な家族を読み取り、「家庭の教育力低下」からは、家族独自の教育としての家庭教育を求めるもの、学校だけで教育がなされるものではないという認識を確認している。

また、核家族化・少子化による家庭の「教育力の低下」といった批判自体を、きわめて

政治的・政策的な戦略に基づくものである、とする広井（2009a）は、『子どもの問題の原因は家庭にある』という言説こそが、親の教育責任の重大性を最も端的に示」（広井2009a,p.34）すものであるとし、それによって、社会や国の責任以前に、家庭の責任を問うことができるものとなっていることを指摘している。そして、少年犯罪や育児不安、児童虐待、孤食、ニート、引きこもりなど、90年代後半からの相次ぐ社会問題に対して、その責任を親や家庭に求め批判する声の増大をあげている。岡本（2004）もまた、家族が大きな社会的圧力を受けていることを指摘し、「家庭の教育への積極性は、『家族の教育を担うべきである』という社会規範の反映」（岡本2004,p.199）であるとしている。

岡崎（2004）は「子どもの問題行動や病理の原因を分析するとき、これを短絡的に親・家庭、教師・学校、住民・地域組織などの、個別的な条件に結びつけてとらえることはできない」（岡崎2004,p.28）としている。また、きょうだい、親子、祖父母などとの人間関係による人間形成機能が著しく低下してきていることを示した上で、「家庭における子どもの役割が、きちんと学校に行くこと、そしてよい学業成績をあげることとなると、家庭は学校の補完というよりも、その一部に組み込まれたことになる。もちろん、教育の役割分業という面で、補完的であることをもって、これを一方的に問題であると決めつけることはできない。重要な点は、現代の日本において、この補完すらできない家族が、生まれてきていることである。」（岡崎2004,p.35）と指摘している。

ともあれ、千葉（2014）が「家庭教育をめぐる問題は確かに教育問題であるが、しかし教育は教育の世界内だけで成り立つものではない」（千葉2014,p.57）としているとおり、様々な角度から「家庭教育」をとらえていくことが重要であると考ええる。

第4節 本章のまとめ

第1節から第3節において、登場から変遷、そして諸問題を概観してみた。ここでは、第1章のまとめとして、「家庭教育」という言葉について、もう一度現在言われていることを確認しておきたい。

家庭教育をめぐる現状を梅景（2010）は、家庭間の社会経済階層のちがいや地域差などを反映しながら、「過熱」している部分と、「十分に対応できない」部分とが同時に存在していることを指摘し、石川（2011）は、日本国内において家庭教育への関心が高まっていることは、家庭間の「格差」の拡大と母親の「葛藤」の増大という2つの問題を引き起こすとしている。

太田（1994）は、共同体から家族が独立の度合いを高め、伝統社会における共同体の教育に代わって、家族が独自の教育を行うようになったとし、17世紀から20世紀つまり江戸時代の初期から今日に至る長いプロセスを通じて、共同体から閉鎖的直系家族が独立を果たし、地域差や階層差を持ちながら家族の教育が成立したとしている。ところが、現

代社会におけるその家族はどうか。「近代家族を形成・維持できる人々と形成・維持できない人々に分裂している」（山田2013,p.658）との指摘のとおりである。

「子育てに熱心に取り組んでいる家庭では教育に拍車がかかる一方で、それができない家庭はますます置き去りにされるような力学が働く。」（宮本2012,p.30）とされ、「個々の家庭の初期条件の違いを無視して家庭教育に対する親の自覚を喚起することは、もっとも脆弱な家庭を排除する結果となっている。」（宮本2012,p.30）とも指摘される。

「旧来、『家庭教育』という概念が家訓や家風に象徴されるように学校教育に対する相対的に独自の教育領域として存在していたのにたいして、現代の家庭教育は、むしろ学校教育に従属する補完機能あるいは学校教育対策しかもてなくなっている」（堀尾1997,p.44）との指摘は、かつての「家庭教育」の姿といえる。いま、「補完」も「対策」もできない家庭が存在している。これは、「家庭教育」を一括りで捉えることができない状況のはじまりを意味しているといえる。

第2章 各種メディアからの分析

第1節 「家庭教育」と「メディア」の関係について

「私たちの住む世界はあらゆる意味でメディアに包み込まれ、それなしでは世界を認識することも、社会に関わることもできなくなっている。」(水越2011,p.14)と語られ、「近代化が進み、マス・メディアが発達・普及した社会では、一般に社会の複雑性が増大し、社会変動の速度が増し、さらにはメディア情報の機能や社会におけるその種の集中度が増大しているので、社会の構成員のメディア依存度は概して高くなる傾向にある。」(大石2006,p.121)とされる。

共同体の教育が閉鎖的直系家族によるものとなっていることは、前章で確認したとおりである。そこで、各家庭が求める「家庭教育」についての情報源もまた、共同体社会におけるものから、メディア(マス・メディア)へと移行している、と考える。その意味から、さまざまなメディアの中で「家庭教育」という言葉がどのように使われているのかを分析することは、その多義性を探求する上で有効でありかつ対象として適している、と考える。言い換えれば、それは、各種メディアによる異なった捉え方の存在を明確にすることにより、「家庭教育」という言葉のもつ多義性が明るみとなるということである。

また、本稿では、言葉に注視していくわけであるが、メディアにおける言葉について以下の指摘を確認しておきたい。「現在は音声や映像も含めてマルチメディアの時代と言われているが、その基本となる概念を形作っているのはことばである。」(湯浅2005,p.318)とされ、語の「意味」も語の「価値」も、その語の内部には存在していない(湯浅2005)とされる。また語の意味は、語同士の記号としての関係性から発生するとする難波江ら(2004)は、「あるものの価値は、それ自体によって決まるのではなく、それがそれ以外のものとどのような関係にあるかによって決まる」(難波江ら2004,p.49)としている。また、ウィットゲンシュタイン(1953)は「語の意味とは、言語内におけるその慣用である」(Wittgenstein 1953,p.49)とし、「どのような行為のしかたがこれらのことばに随伴するか。」(Wittgenstein 1953,p.273)に注視することを指摘している。そこで、本稿では「家庭教育」という言葉が、各種メディアで扱われるときに伴ってあらわれる「さまざまな言葉」から、その意味(概念)に迫りたい、と考える。

ここで、メディアにおける「家庭教育」の位置を確認しておきたい。ハロウェイ(2010)は「親が子育てをするときには、暗黙の仮定やモデルに基づくこともあるだろうが、現代社会では、他の親の子育てを見たり子どもの教師と話したり、さらにはさまざまなメディアに接することによって、他のモデルを知る機会もある」(Holloway 2010,p.11)としている。そして宮澤(2011)は、「欲望の三角形」理論⁽¹¹⁾を紹介したうえで「欲望の対象が人物であるばあいもちろんあるが、逆に欲望をかきたてる媒介者は人物とはかぎらない。それは、媒介するもの(メディア)一般に拡大される。」(宮澤2011,p.231)とし、岩崎(1998)は

「マスメディアによって提供される情報は、そのほとんどが何らかの形で『消費』と結びついた情報である」(岩崎1998,p.64)としている。また、「子どもも教育も消費から遠い存在とはいええないのが現実」(千葉2009,p.110)とされ、「親は教育を自分で行うだけでなく、むしろ自分に代わる教育遂行者を選択し、教育をサービスとして購入する傾向を強めている。家計における教育費の占める割合の変化は、教育を消費の対象として考え行動した結果としてみることができよう。家族規模が小さくなってきている現在、家族は自分たちに行えることの限界から、教育の外部化をさらに推し進めようとしている。」(千葉2009,p.126)と指摘される。そして、石田(2003)は、「私的な領域においても、私たちが家族や個人の生活の意味をつくりだしていくのはさまざまなメディアの影響を受けてのことであって、私的とされる欲望や消費さえもが、テレビや新聞や雑誌の働きに大きく左右される」(石田2003,p.85)としている。引用が長くなったが、「家庭教育」が、メディアに「子育てのモデル」を求め、「欲望」をかきたてられ、「消費」の対象とされているといえ、少なからずの影響を受けているといえる。

そこで、分析の対象とするメディアについてであるが、可能なかぎり多くの種類にあたるのが重要であると考え。藤竹(2012)は「既存のメディアが及びもつかなかったコミュニケーションの様式が開拓されている。」(藤竹2012,p.18)といい、「メディアはメッセージである」(McLuhan 1964,p.7)とするマクルーハン(1964)のいったとおり「メディアは相互に作用し、新しい子孫を生み出」(McLuhan 1964,p.51)した現代社会には、さまざまなメディアが存在している。言説分析においてより重要なこととして赤川(2001)は「誰がどのような立場から語っても、似たような語りを構成してしまうという、言説が生産される『場』のありようである。」(赤川2001,p.77)としている。そのことから、本稿では、新聞やテレビはもちろん、雑誌や書籍、そしてインターネットといった多くの形態を異にする各種メディアを分析対象とした。

まず、市井(しせい)の声にあらわれる「家庭教育」の意味合いをおさえることができるのではないかと考え、新聞の投書欄をとりあげた。そして、書籍(書籍通販におけるベストセラー)については、さまざまな識者がもつ「家庭教育」の意味(概念)を把握することができるのではないかと考えとりあげた。また、インターネットの普及にともない広がりを見せているQ&Aサイトからは、その匿名性により、「家庭教育」における本音ともいえる側面がうかがえるのではないかと考え、テレビ番組については、日常的に接触頻度の高いメディアとしてとりあげることで、大衆に受け入れられる「家庭教育」の捉え方からのアプローチが可能であると考えとりあげた。次に、家庭教育雑誌については、「家庭教育」に関心をもつ購読者層に受け入れられるその意味を掌握することができると考えとりあげ、公立図書館における所蔵の書籍名からは、広範囲にわたる「家庭教育」の意味(概念)の捉え方にせまることができると考えとりあげた。最後に、中教審答申については、純粋にはメディア(媒体)とは呼べないが、政策文書内で使われる「家庭教育」の意味内容について確認することができると考えとりあげた。

以上、7種類のメディアを分析対象にすることで、「家庭教育」という言葉の使われ方がメディアによって異なることを明らかにすることができ、多義性の存在を明らかにできるのではないかと考える。

言説分析における関心領域のメディアへの移行の高まりについて、岡井（2012）は、ギャレットとベル（Garrett&Bell 1998）によるその理由の指摘を紹介しているが、そのひとつに「メディアの言語を見ることで、言語とコミュニケーションを通じた社会的な意味とステレオタイプについて多くを知ることができること」（岡井2012,p29）をあげている。ここに、「家庭教育」という言葉のもつ意味をメディアから追求する意義があるといえる。

第2節 新聞投書欄にみる特徴

ここでは、新聞投書欄からの分析を行う。朝日新聞の新聞投書欄を対象として、「家庭教育」という言葉を含むその投書の文面の中に、どのような言葉が伴って使用されているかをみる。

メディアとしての新聞について、ここで確認しておきたい。「総発行部数と普及率の両方の数字をみてみれば、日本のように大規模に新聞が発行され、その上、高い普及率を示している国はない」（伊藤2005,p.23）とされ、井川（2005）は「朝も夕方も、自宅のポストに新聞が届けられているというのは、世界の中ではかなり特殊な光景である。」（井川2005,p.162）としている。

また、新聞の投書欄についても確認しておきたい。「読者投書欄は『加算的（デジタル）な多数意見』ではなく『類似的（アナログ）な全体の気分』の表出であり、その点で『世論』的な性質をもつと言え」（宮武2003,p.198）とされ、また、宮武（2003）は「新聞社が言いたいことを投書に代弁させることは、当然ありうる。投書欄に掲載された『国民の声』は、新聞社の担当者が『世論（せろん）』の代表として選びだしたものにすぎない。」（宮武2003,p.200）としている。このことから、新聞投書を「国民の声」＝「世論」としてとらえることが出来ないといえる。しかし、メディアとしての新聞に掲載された「投書」（世論の代表として選びだされたもの）において、「家庭教育」という言葉がどのように捉えられ、そして使われているのか、ということについては、その分析対象となりえると考えられる。

データの概要：朝日新聞オンライン・データベース「聞蔵Ⅱ」を利用し、キーワード「家庭教育」を含む新聞投書「声」の欄を抽出し、テキストマイニングにより、伴って現れる頻出語を確認する。（1988年4月26日～2013年3月5日の期間で、キーワード「家庭教育」を含む新聞投書数103件）

以下、表1が新聞投書欄からの抽出語（上位50語）である。

表 1 新聞投書欄からの抽出語とその出現回数

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	教育	294	11	問題	52	21	生活	36	31	知る	30	41	母親	26
2	家庭	235	12	考える	49	22	心	35	32	生徒	29	42	責任	25
3	子供	132	13	子	48	23	感じる	34	33	仕事	28	43	発達	25
4	学校	127	14	今	45	24	事件	33	34	時代	28	44	基本	24
5	思う	118	15	大人	44	25	障害	33	35	言葉	27	45	国民	23
6	親	114	16	必要	43	26	日本	33	36	最近	27	46	命	22
7	社会	78	17	教師	39	27	大切	32	37	多い	27	47	参加	21
8	人	61	18	自分	37	28	指導	31	38	時間	26	48	持つ	21
9	言う	57	19	聞く	37	29	見る	30	39	先生	26	49	条例	21
10	子ども	52	20	教える	36	30	前	30	40	息子	26	50	人間	21

新聞投書欄に現れる抽出語のうち、「事件」「障害」「日本」（出現回数33）、「仕事」「時代」（出現回数28）、「国民」（出現回数23）、「条例」（出現回数21）などは、他のメディア（の上位50位内と比較した場合）に現れていない、特徴的な頻出語といえる。

新聞への投書が時事的な問題に対しての意見などであることから考えて、この特徴的な言葉の頻出は妥当なものである、と考える。

表 1 からは、特に「家庭教育」と「対社会」や「対家庭」とのかかわりに関する表出が多く読みとれ、その相互性に新聞投書欄の特徴があるといえる。

また、新聞投書欄では「規範性」を示すものや、「社会問題」として捉えた内容が多いことがうかがえるが、ここでは参考にそれらの内容を示す投書の例を一部以下に挙げる。

（「規範性」を示すもの）

- ・しつけや人間としてのマナーなど、家庭教育の教師となるべき保護者が、傍観者になってはならないと思う。（無職, 67歳, 2009年6月17日）
- ・しっかりとした家庭教育をして社会に送り出すことこそ親の役目、責任だと思う。（主婦, 75歳, 2008年4月7日）
- ・親が「規範」を示すという家庭教育の基本が忘れられつつあるというのが、それは法律で解決できるのだろうか。（無職, 36歳, 2002年11月22日）
- ・ある程度の年齢に達しながら、他人の痛みが分からない。人格形成に必要な家庭教育の段階で、すでに落ちこぼれているのだ。（教員, 27歳, 1990年8月23日）

（「社会問題」として捉えているもの）

- ・母親はパート就労などで家庭教育のゆとりが確実に失われている。（主婦, 53歳, 2008年10月31日）
- ・母子家庭では家庭教育が十分にできない、と考えていないか。（大学院生, 28歳, 2007年3月13日）
- ・実態が分からない分、よけいに幼児の知育教育が盛んなような気がします。就学前の家庭教育が悪いとは思いません。（主婦, 38歳, 2007年1月13日）

- ・最近は家庭教育を軽視しているように思えてならない。家庭と学校が一人ひとりの児童、生徒をよく見
つめ、連携し、指導をしっかりとしてほしい。(無職, 70歳, 2005年9月25日)
- ・家庭の中には子供にとって実生活を通しての学び場がたくさん眠っている。それを生かせば、家庭教育
の低下が防げるように思う。(主婦, 46歳, 2003年12月18日)
- ・両親共に子供の家庭教育に携わることは、いつの時代も必要だったはずだ。(主婦, 40歳, 2003年7月18日)
- ・学校5日制を家庭教育を見直すきっかけとし子育ての原点を考えたい。(養護教諭, 43歳, 2002年6月26日)
- ・教師が全力で学校教育に当たっているのと同程度に、保護者の方も家庭教育に力を注いでいただきたい
ものです。(中学教諭, 43歳, 2000年1月16日)
- ・週休2日制は、家庭教育と学校教育の役割分担をはっきりさせ、協力していく良い機会ではないだろう
か。(高校教師, 30歳, 1989年11月18日)
- ・最近、学校側に対する批判が紙上をにぎわしている。だが、学校教育を批判する前に、家庭教育を考え
直すことの方が先ではなかろうか。(主婦, 47歳, 1988年4月26日)

第3節 書籍通販にみる特徴

ここでは、書籍通販からの分析を行う。「ネットショッピング」や「インターネットショッピング」と呼ばれる新たな通信販売の形が定着している。なかでも世界最大の規模である「アマゾン」は、「Amazon.co.jp」という名前で2000年11月に日本に上陸し、書籍通販をはじめとしてその利用者は年々増加している。

村上(2005)は「オンライン書店ルート全体は、利用者が年々増え、データ検索や迅速調達の利便性から客注品の主要ルートへと定着した。」(村上 2005,p.172)とし、同じく伊藤(2006)も、読者がインターネットのウェブサイトを通じて注文するオンライン書店の確実な成長を指摘している。

ここでは、代表的な書籍通販サイトのひとつである先述の「Amazon.co.jp」の検索機能を利用し、カテゴリー「家庭教育」に分類されたベストセラー書籍のタイトル名を分析対象とした。

データの概要：Amazon.co.jpの検索(すべてのカテゴリー〈本〈暮らし・健康・子育て〈妊娠・出産・子育て〈家庭教育〉)により、「家庭教育」の売れ筋ランキング(100冊)の書籍のタイトル名を抽出し、テキストマイニングにより現れる頻出語を確認する。(なお、ランキングは、1時間ごとの更新であり、ここでの抽出は2014年8月20日10:30における検索である。)※書籍タイトル名・著者名については本稿参考資料一覧に付記。

以下、表2が書籍通販からの抽出語(上位50語)である。

表2 書籍通販からの抽出語とその出現回数

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	子ども	29	11	子供	9	21	ドリル	5	31	親子	4	41	決まる	3
2	親	15	12	教える	7	22	右脳	5	32	頭	4	42	左脳	3
3	家庭	14	13	言葉	7	23	伸びる	5	33	力	4	43	才	3
4	脳	14	14	伸ばす	7	24	赤ちゃん	5	34	グングン	3	44	叱る	3
5	育てる	13	15	学習	6	25	方法	5	35	メソッド	3	45	書く	3
6	教育	13	16	歳	6	26	お母さん	4	36	家族	3	46	小学校	3
7	勉強	12	17	読む	6	27	ノート	4	37	科学	3	47	上手	3
8	子	10	18	魔法	6	28	育つ	4	38	開発	3	48	先生	3
9	天才	10	19	やる気	5	29	合格	4	39	久保田	3	49	東大	3
10	学力	9	20	わが子	5	30	習慣	4	40	教師	3	50	入る	3

書籍のタイトル名に現れる抽出語のうち、「天才」（出現回数 10）、「ドリル」「右脳」（出現回数 5）、「ノート」（出現回数 4）、「左脳」「東大」（出数 3）などは、他のメディア（の上位 50 位内と比較した場合）には現れていない、特徴的な頻出語といえる。「家庭学習」に対する「マニュアル」的な面が数多く見られるところに、書籍通販の特徴がよくあらわれているといえる。

広田（2003）は「子育てマニュアルが氾濫している。中にはそうではないものもあるが、多くのマニュアル本や記事は、微妙なやり方で、親たちの不安をつのらせる。」（広田 2003,p.148）としている。これは、後の第 6 節での家庭教育雑誌にみる特徴でもいえることである。また、書籍のタイトル名の中に、「魔法」（出現回数 6）、「叱る」「メソッド」（出現回数 3）があるが、これらの抽出語が現れる点は家庭教育雑誌と共通している。

第 4 節 Q&A サイトにみる特徴

ここでは、Q&A サイトからの分析を行う。

インターネットの到来によって「私たちは口誦的であると同時に文語的、私的にして公的、個人的にして集合的である最初のメディアを持つにいたった。」（Kerckhove 1995,p.227）とケルコフ（1995）はいう。「インターネットが情報や討論の場の提供にすぐれた機能をもつことは異論の余地はない。」（安野 2006,p.29）とされ、橋元（2011）は「ネット空間では、意見を交換する場が無数に提供されている。」（橋元 2011,p.140）として、一利用者の質問に何人かが回答をよせる「Yahoo!知恵袋」をその代表例として挙げている。

松田（2014）は、「質問サイトでは、質問に対し寄せられた優れた回答に高い評価が与えられ、それが『ベストアンサー』として目立つかたちでサイト上に提示される。その評価が『見える』ことは次なる互酬的行為を誘引する。このような過程が繰り返されることで互酬的行為が蓄積されれば、信頼できない情報発信が抑制されることになる。」（松田 2014,p.211）とし、「書き込みが誰からでも見えること、またそれが蓄積されていていつでも参照可能であることが、匿名性を保ったまま、情報源としての信頼性を獲得できることになる。」（松田 2014,p.212）としている。

「文字通り質問に対して回答が寄せられるもの」(藤竹 2012,p.279)としての Q&A サイトにおけるテキストは分析対象となる、と考える。

データの概要：Q&A サイト (Yahoo!知恵袋) においてキーワード「家庭教育」として、「質問のみ」を対象とするよう条件指定し検索する。対象となる件数が約 51,413 件 (2015 年 3 月 18 日時点) となり、うち「家庭科教育」「家庭教師」「教育学」を除き、関連度順に 33 件を抽出した。そして、テキストマイニングにより、質問文に現れる頻出語を確認する。

以下、表 3 が Q&A サイト (Yahoo!知恵袋) からの抽出語 (上位 50 語) である。

表 3 Q&A サイト (Yahoo!知恵袋) からの抽出語とその出現回数

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	教育	233	11	親	25	21	躰	19	31	意見	14	41	時間	11
2	家庭	203	12	お願い	23	22	悪い	18	32	生活	14	42	借りる	11
3	思う	97	13	責任	22	23	自分	18	33	学級	13	43	条例	11
4	言う	68	14	聞く	22	24	出来る	18	34	お金	12	44	人間	11
5	学校	65	15	人	20	25	社会	17	35	見る	12	45	多い	11
6	子供	52	16	母子	20	26	書く	17	36	現在	12	46	母	11
7	教える	40	17	考える	19	27	小学校	16	37	指導	12	47	方針	11
8	教師	33	18	場合	19	28	補足	16	38	保護	12	48	回答	10
9	子	28	19	勉強	19	29	良い	15	39	学習	11	49	支援	10
10	質問	25	20	問題	19	30	ローン	14	40	持つ	11	50	受ける	10

Q&A サイト (Yahoo!知恵袋) に現れる抽出語のうち、「母子」(出現回数 20)、「躰」(出現回数 19)、「悪い」(出現回数 18)、「良い」(出現回数 15)、「ローン」(出現回数 14)、「学級」(出現回数 13)、「お金」「保護」(出現回数 12)、「借りる」「方針」(出現回数 11)などは、他のメディア (の上位 50 位内と比較した場合) に現れていない、特徴的な頻出語といえる。

荒木 (1973) は「個の論理は本音であり、集団の論理はたてまえである。」(荒木 1973,p.53) といったが、一利用者の質問である Q&A サイトだからこそその「本音」としての抽出語がここに現れているのではないだろうか。

母子世帯出身者の教育達成について、余田 (2012) は、短大・大学進学における格差の拡大傾向をあげ、母子世帯出身者は一貫して低い進学率を示していると指摘している。また、日本の教育への公的支出が他の先進諸国に比べ少ないことを指摘する阿部 (2008) は、「日本の公的教育制度は、公的な負担よりも、私的な負担によるところが大きく、さらに、公立高校や公立大学など比較的に経済的負担が軽い学校に進学したり、奨学金を取れるような学力を身につけるためには、それなりの公教育外の投資 (塾など) を必要とする、という 2 つの経済的ハードルが存在する。」(阿部 2008,p.160) としている。

ともあれ、「日本の家族・子ども向けの公的支援は、先進國中、最低水準である。」(駒村 2009,p.180) との指摘も確認しておきたい。

第5節 テレビ番組にみる特徴

ここでは、テレビ番組からの分析を行う。

「メディアはあるがままの現実を映すのではなく、誰かが目的をもって制作したものである。」(小室 2007,p.162) とされる。

かつて(1965年4月から1990年3月末まで)、教育テレビの学校放送枠で「おかあさんの勉強室」という長寿番組が放送された。その番組の目的には、「学校教育と家庭教育の連結をめざして」とNHK年鑑にはあり、津田(2013)は、「教育の機会均等を推進するために、母親が、当時の学校教育の教科の内容を知り、子どもが円滑な学校生活を送るために、家庭での子どもの望ましい育て方を伝えるための番組であった」(津田2013,p.161)としている。そこで、この番組は、すでに上記のとおり学校教育との関係を意図してその制作が行われていることから、テレビ番組における「家庭教育」という言葉の意味合いを分析するには相応しくないものと判断した。

そこで、他の番組を対象にと考え同じ長寿番組(1976年4月よりスタート。独立した30分番組としては1977年4月よりスタート。現在も放映中。)でもある「テレビ寺子屋」を選んだ。この番組について放送ライブラリー⁽¹²⁾では、「各界の著名人を講師に、家庭教育をテーマにしたトーク番組」としてその概要を紹介しており、本稿の研究目的に合致すると考え、地方局制作の全国ネットとして珍しいとされるこの番組を分析対象とした。

テレビというメディアについて、ケルコフ(1995)は「テレビは、人びとが同時に同じ内容を見ていることで安心感を与えてくれる。」(Kerckhove 1995,p.239)とし、「今日の大衆は、テレビがもっとも重要で、もっとも信頼にたる、もっとも『権威ある』メディアだと考えている。」(Kerckhove 1995,p.269)としている。また、藤竹(2012)は「生活・趣味に関する情報源として最も役立つメディアとしては、4割近くの人々がテレビを挙げている。」(藤竹2012,p.250)としている。

テレビというメディアの性質上、その視聴スタイル(漠然視聴か選択視聴か)についても確認しておきたい。三矢(2014)は、資料をもとに漠然視聴か選択視聴かの推移を示しているが、ここで対象とする番組は内容の上から、漠然視聴(「何となく見る」)ではなく、選択視聴(「好きな番組を見る」)であるといえる。

データの概要:「テレビ寺子屋」における講演タイトル名(2007.09.01~2015.03.28)に現れる頻出語をテキストマイニングにより確認する。※タイトル名・講演者名については本稿資料一覧に付記。

以下、表4がテレビ番組からの抽出語(上位50語)である。

表4 テレビ番組からの抽出語とその出現回数

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	子ども	48	11	コツ	7	21	伸ばす	6	31	お母さん	4	41	大人	4
2	学ぶ	20	12	家族	7	22	親	6	32	愛	4	42	地域	4
3	子育て	18	13	幸せ	7	23	パパ	5	33	学力	4	43	変える	4
4	自分	14	14	子	7	24	育	5	34	希望	4	44	豊か	4
5	育てる	13	15	人	7	25	考える	5	35	教育	4	45	遊び	4
6	心	13	16	育む	6	26	親子	5	36	見る	4	46	アグネス	3
7	人生	11	17	育児	6	27	大切	5	37	思い出す	4	47	意味	3
8	生きる	11	18	絵本	6	28	夢	5	38	持つ	4	48	歌	3
9	力	9	19	言葉	6	29	命	5	39	食	4	49	楽しい	3
10	コミュニケーション※	8	20	出会い	6	30	絆	5	40	人間	4	50	楽しむ	3

※コミュニケーション

他のメディア（の上位50位内と比較した場合）にはない抽出語として、「テレビ寺子屋」の講演タイトル名にあらわれているのは、「人生」（出現回数11）、「コミュニケーション」（出現回数8）、「コツ」「幸せ」（出現回数7）、「絵本」「出会い」（出現回数6）、「夢」「絆」（出現回数5）、「愛」「希望」「豊か」（出現回数4）などである。

そこで、テレビ番組における特徴として、徳目が並び情操（情感豊かな心）面を強調しているという点をあげることができる。

詫磨（1985）は「運命的な出会いで親と子の関係が始まる」（詫磨1985,p.3）といい、また、「家庭教育という、お説教くさいとか偽善的なものまで連想することが多い。」（詫磨1985,p.187）としている。そして、柏木（2001）は、「日本では『できるだけのことをしてやる』ことが即、親の愛情と考えられています。この〈親の愛情＝してあげる〉イデオロギーも、一層庇護的な環境をつくる方向に働いていることも否めません。」（柏木2001,p.175）と指摘しているが、「テレビ寺子屋」は、これらを俯瞰し、新しい気付きを放送のたびに示しているといえる。

第6節 家庭教育雑誌にみる特徴

雑誌というメディアについて、佐藤（2007）は「雑誌は読者層をセグメント化する『純粋メディア』である」（佐藤2007,p.105）としている。また、天童ら（2011）は「雑誌言説は、その基盤を資本主義的生産にもつメディア言説である。」（天童ら2011,p.67）として、メディアの「生産物」としてのメディア言説が商品のような性格を帯びる、としている。

さまざまな家庭の教育戦略のノウハウを前面に押し出した新しいタイプの教育情報誌が、2005年から2006年にかけてあいついで創刊され話題となったことを梅景（2010）は示し、横田（2013）は、ブームとしての「中学受験」という視点から「中学受験を目指す親子をターゲットに絞った雑誌が大手出版社から次々と創刊された。」⁽¹³⁾（横田2013,p.61）としている。中学受験に関する、樋田（1993）の「私立中学受験は小学校の手

を離れ、まったくもってプライベート・セクターですすめられ（略）子どもを受験させる母親たちは、関心が受験に向っているせいもあってか教育情報一般（受験情報ではない！）に関しても学習塾と受験情報誌の情報を重要視している。」（樋田1993,p.85-86）という指摘も確認しておきたい。

データの概要：家庭教育雑誌である『プレジデント Family』『日経キッズプラス』の2誌を取り上げ、それぞれの目次に現れる頻出語を、テキストマイニングにより確認する。『プレジデント Family』（季刊）については、2006年9月～2008年12月を、『日経キッズプラス』（月刊）については、2005年5月～2010年2月を対象とした。

※『プレジデント Family』の目次タイトルについては本稿参考資料一覧に付記。『日経キッズプラス』の目次タイトルについては省略。

以下、表5・表6がそれぞれ『プレジデント Family』『日経キッズプラス』からの抽出語（上位50語）である。

表5 『プレジデント Family』からの抽出語とその出現回数

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	子	9	11	教育	3	21	すべて	2	31	家庭	2	41	行く	2
2	子供	6	12	公立	3	22	わが子	2	32	解き方	2	42	困る	2
3	叱る	5	13	合格	3	23	ウソ	2	33	顔	2	43	試験	2
4	親	5	14	塾	3	24	ゲーム	2	34	企業	2	44	授業	2
5	親子	5	15	大学	3	25	タイプ	2	35	強い	2	45	集中	2
6	中学	5	16	脳	3	26	違う	2	36	教える	2	46	伸びる	2
7	私立	4	17	発表	3	27	一貫	2	37	教師	2	47	診断	2
8	育つ	3	18	父	3	28	一流	2	38	賢い	2	48	成績	2
9	学校	3	19	問題	3	29	夏休み	2	39	言葉	2	49	全国	2
10	学力	3	20	お買い得	2	30	家計	2	40	公開	2	50	贈り物	2

表6 『日経キッズプラス』からの抽出語とその出現回数

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	子ども	35	11	キレ	6	21	学力	4	31	男の子	4	41	好き	3
2	子	13	12	メソッド	6	22	冊	4	32	付く	4	42	今	3
3	伸ばす	13	13	夏休み	6	23	受験	4	33	勉強	4	43	最高	3
4	学習	10	14	家庭	6	24	習い事	4	34	遊ぶ	4	44	才能	3
5	親子	10	15	心	6	25	塾	4	35	やる気	3	45	使い方	3
6	教育	9	16	本	6	26	出身	4	36	一人っ子	3	46	習慣	3
7	育てる	7	17	力	6	27	女の子	4	37	引き出す	3	47	上手	3
8	学ぶ	7	18	パパ	5	28	伸びる	4	38	科学	3	48	性格	3
9	親	7	19	アップ	4	29	身	4	39	学校	3	49	正しい	3
10	脳	7	20	ママ	4	30	人	4	40	強い	3	50	生かす	3

『プレジデント Family』の場合、「中学」（出現回数 5）、「私立」（出現回数 4）、「公立」「大学」（出現回数 3）が、『日経キッズプラス』の場合、「キレ」（出現回数 6）、「アップ」

「受験」「習い事」「出身」(出現回数 4) が、また両誌にあらわれている「塾」(それぞれ出現回数 3 と 4) などがいずれも他のメディア (の上位 50 位内と比較した場合) には現れていない特徴的な頻出語といえる。

これらの頻出語に、佐藤 (2013) の指摘する、習い事や塾に通わせないと不安という意識や、保護者の教育熱心さが重要であるという意識の高まりが、そして、公教育への不信を背景とした小・中学受験という教育的リスク回避戦略 (片岡 2011) が感取される。特定のテーマに興味を有する限定された層を対象に、編集加工された情報を提供する (橋本 2012) という雑誌メディアは、「家庭教育」を「教育戦略」という視点から捉え、購読者に対して「戦略情報」を提供しているといえる。

小塩 (2002) の「子どもを塾に通わせることは、塾に行っていれば子どもは賢くなる (あるいは遊ばない) という安心を親が購入する行動ともみなせないわけではない。こうした場合、子どもに教育を受けさせることは、子どもという媒介を経由した親の間接的な消費行動と捉えられる。」(小塩 2002,p.91) という指摘にも注目しておきたい。

第 7 節 公立図書館にみる特徴

ここでは、公立図書館 (公共図書館) からの分析を行う。もちろん、公立図書館をメディアそのものとしてとらえることは出来ない。マスメディアの定義を、藤竹 (2005) は「マスメディアは、新聞、ラジオ、テレビ、雑誌、書籍、映画、CD、ビデオ、DVD など最高度の機械技術手段を駆使して、不特定多数の人びとに対して、情報を大量生産し、大量伝達する機構およびその伝達システムをいう。」(藤竹 2005,p.13) としている。しかし、情報を伝達する機構といえる図書館 (公共サービスとしての) を利用して、「家庭教育」に関する書籍を貸し出しする人がいることから、本稿の課題にそった対象として公立図書館をあげることは可能であると考ええる。またベストセラー本に偏らない形での分析にも資すると考える。

橋元 (2011) は、文部科学省の『社会教育調査』より「1996年から2008年にかけての公共図書館の貸出冊数、帯出者数の推移をみれば、全体として貸出数、帯出者数とも増加傾向にある」(橋元 2011,p.84) とし、「経済不況で個人の消費が抑えられ、外で書籍が買えない分、図書館で間に合わせる人が増えているとも言える。」(橋元 2011,p.84) としている。

データの概要 : 大阪市立図書館 (<http://www.oml.city.osaka.lg.jp/>) の蔵書検索を利用して、「家庭教育」(簡易検索) の検索結果一覧を出版年月逆順にて表記する。検索数、全 4584 件 (2014 年 8 月以前) の中から上位 100 件の書籍タイトル名に現れる頻出語をテキストマイニングにより抽出する。※書籍タイトル名などは本稿参考資料一覧に付記。

以下、表 7 が公立図書館からの抽出語（上位 50 語）である。

表 7 公立図書館からの抽出語とその出現回数

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	子ども	43	11	お母さん	7	21	教育	5	31	やる気	3	41	怒る	3
2	子	24	12	伸びる	7	22	言葉	5	32	パパ	3	42	読む	3
3	育てる	21	13	心	7	23	自分	5	33	一生	3	43	母親	3
4	子育て	20	14	わが子	6	24	伸ばす	5	34	英語	3	44	方法	3
5	親	13	15	育つ	6	25	叱る	4	35	決める	3	45	ゲンゲン	2
6	勉強	13	16	学力	6	26	習慣	4	36	合格	3	46	コントロール	2
7	本	11	17	変わる	6	27	大切	4	37	困る	3	47	ダメ	2
8	ママ	8	18	魔法	6	28	男の子	4	38	自立	3	48	バイブル	2
9	算数	8	19	力	6	29	変える	4	39	小学生	3	49	ヒント	2
10	女の子	8	20	教える	5	30	母	4	40	親子	3	50	プロ	2

公立図書館に現れる抽出語のなかで、他のメディア（の上位 50 位内と比較した場合）にあらわれない言葉は「一生」「英語」「怒る」（出現回数 3）などである。

抽出されたテキストのその多くが、他のメディアにもあらわれているということが、公立図書館の特徴ともいえ、このバイアス（偏り）のない結果は、「公立図書館の任務と目標」⁽¹⁴⁾にある「図書館は、すべての住民の多様な資料要求に応えるため、これらの資料を幅広く、豊富に備える。」からも窺える。

第 8 節 中教審答申にみる特徴

国の教育政策を左右する文書としての中教審答申（中央教育審議会答申）をとりあげ、教育方針（国の）上における「家庭教育」に着目する。（第 7 節の公立図書館と同じく中教審答申はメディアではない。しかし、政策文書の中での「家庭教育」という言葉に伴って現れる言葉を分析することは本稿の課題に合うものとしてとりあげた。）

ここでは、数多く出されている答申の中から、「家庭教育」という言葉をその章や節にもつ『生涯教育について 1981/6』と『21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について 1996/7』を対象とした。

データの概要：「生涯教育について（答申）（第 26 回答申 昭和 56 年 6 月 11 日）」と「文部省 審議会答申等 21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について 第一次答申 平成 8 年 7 月 19 日）」の 2 答申より、「家庭教育」という言葉を含む章・節についてののみ対象として、そこに頻出する語をテキストマイニングにより抽出した。

以下、表 8 が中教審答申からの抽出語（上位 50 語）である。

表 8 中教審答申からの抽出語とその出現回数

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	家庭	80	11	体験	15	21	持つ	9	31	能力	7	41	特に	6
2	教育	70	12	重要	14	22	図る	9	32	配慮	7	42	変化	6
3	子供	45	13	整備	13	23	役割	9	33	一層	6	43	それぞれ	5
4	親	29	14	生活	13	24	親子	8	34	参加	6	44	過程	5
5	社会	24	15	必要	12	25	相談	8	35	指摘	6	45	基本	5
6	機会	19	16	家族	10	26	地域	8	36	条件	6	46	機能	5
7	充実	19	17	支援	10	27	発達	8	37	推進	6	47	共同	5
8	学習	18	18	提供	10	28	在り方	7	38	成長	6	48	経験	5
9	考える	16	19	父親	10	29	施策	7	39	生きる	6	49	自立	5
10	子育て	15	20	活動	9	30	責任	7	40	大切	6	50	十分	5

中教審答申に現れる抽出語のうち、「機会」「充実」（出現回数 19）、「体験」（出現回数 15）、「重要」（出現回数 14）、「整備」（出現回数 13）、「提供」（出現回数 10）、「活動」「役割」（出現回数 9）、「相談」（出現回数 8）などは、他のメディア（の上位 50 位内と比較した場合）には現れていない、特徴的な頻出語といえる。

これらのテキストには「行政の課題」と「家庭の役割」があらわれている。このことから、中教審答申の特徴は、「家庭教育」をサポートの対象として捉えている点にあるといえる。しかし、と同時に、家庭にあるべき姿を提示しているという点で、各家庭への「努力要請」的な面も併せもっているといえる。

広井（2009b）は「様々な子どもの問題を過大に取り上げ、それを親や家庭のせいにして親の責任を強調し続けてきた 1970 年代以来の規範的な政策や論調こそが、子どもを生き育てることに対する不安や負担感をかき立ててきた最大の原因に違いない。」（広井 2009b,p.179）とし、また、しつけの学校への依存という言説が国家の責任や財政負担の軽減を正当化する論理として用いられていると指摘する。また、家庭教育の在り方を議論する前提を、千葉（2014）は「家族関係をより安定させるために、家族を集団として見ること」（千葉 2014,p.57）とし、結果として「家族を法によって守り、家庭生活を成立させるところから、家族は家庭教育として何を行いたいのか、教育として子どもに何を伝えるべきなのかが生み出されていく」（千葉 2014,p.57）との指摘を確認しておきたい。

第 9 節 本章のまとめ

ここでは、本章のまとめとして、以下の点を確認しておきたい。

それは、各種メディアごとに特徴的な言葉が現れており、その言葉からそれぞれ違った面が読みとれるという点である。例えば、Q&A サイトでは、「母子」「ローン」「お金」「保護」「借りる」など“教育にはお金がかかる”という面があらわれており、家庭教育雑誌では、「私立」「公立」「塾」「受験」「習い事」など“家庭の教育戦略”という面があらわれている。そして書籍通販からは、「ドリル」「右脳」「ノート」「東大」など“子育てマニュアル

ル”という面を読みとることができる。

ブラウン（1987）は「テキストの表示的，明示的な面が情報内容を伝える一方，拘束と関係をうむ面はそれとなく伝えられる。」（Brown 1987,p.132）という。「家庭教育」という言葉に含まれる“規範性”や，「家庭教育」に取り組む“親の不安”，そして「家庭教育」からみた“経済的な格差”といった面もまた浮かび上がってきているのではないか，と考える。

社会にとっての「家庭教育」の意味と，家族にとっての「家庭教育」の意味は当然違ってくる。それはメディアの種類（そのメディアの立ち位置）によっても違いが現れてくるということである。たとえば，中教審答申であれば，社会（国）にとっての「家庭教育」であるだろうし，Q&Aサイトであれば，親（家庭）にとっての「家庭教育」であるだろう，ということである。ともあれ，本章での分析を通し，「家庭教育」という言葉に伴って現れる語には，各種メディアごとに“違い”と“特徴”のあることがわかった。

第3章 「家庭教育」に随伴するテキストからみた各種メディアの相関

第1節 数量化理論Ⅲ類の利用について

第2章において、各種メディア（類するものを含む）の分析を通して、それぞれに現れる特徴的な抽出語をあげた。その特徴的な抽出語以外の抽出語（頻出語）の多くは、他のメディアと重複している。もちろん、検索のキーワードが「家庭教育」であるため、「家庭」「教育」「子ども」（「子供」「子」を含む）「親」などの言葉は、その重複回数は多い。しかし、頻出語のいくつかは2～3のメディアに現れるが、それ以外のメディアには現れていないなどさまざまな違いがある。そこで、その違いに注視した分析が必要であると考えられる。

その意味から、ここでは、数量化理論Ⅲ類⁽¹⁵⁾を利用して、上記の点（各種メディアにおける同異）を分析するとともに、クラスター分析を加えていきたい。

具体的な利用手順については、まず、第2章の表1～8に示された抽出語の中から、複数のメディアに重なって現れる言葉を選び出す。その際に、同じ意味を表す（と考えられる）言葉（例えば、「父親」「父」「パパ」など）は1つにまとめるなどの処理を行い、上位語から数語（38語）⁽¹⁶⁾を抜き出す。次に、サンプル（抽出語）およびカテゴリ（各種メディア）のデータからなる表（現れている場合は「1」、現れていない場合は「0」）を作成する。そして、多次元データ分析を行い、それぞれ散布図で示し、各言葉の相互関係を可視化する。その後、クラスター分析により、同類ごとの群（クラスター）に分ける。

第2節 数量化理論Ⅲ類による分析

以下に重複している抽出語（38語）と各種メディアごとの出現の有無を示す。

表9 重複している抽出語と各種メディアごとの出現の有無（有り「1」無し「0」）

重複している抽出語	新聞投書欄	書籍通販	Q&Aサイト	テレビ番組	家庭教育雑誌	公立図書館	中教審答申
学校	1	0	1	0	1	0	0
社会	1	0	1	0	0	0	1
問題	1	0	1	0	1	0	0
必要	1	0	0	0	1	0	1
生活	1	0	1	0	0	0	1
心	1	0	0	1	1	1	0
大切	1	0	0	0	0	1	1
指導	1	0	1	0	0	0	0
言葉	1	1	0	1	1	1	0
時間	1	0	1	0	0	0	0
責任	1	0	1	0	0	0	1
命	1	0	0	1	0	0	0
脳	0	1	0	0	1	0	0
勉強	0	1	1	0	0	1	0
学習	0	1	1	0	1	0	1
魔法	0	1	0	0	1	1	0
やる気	0	1	0	0	1	1	0
わが子	0	1	0	0	1	1	0
合格	0	1	0	0	1	1	0
学力	0	1	0	1	1	1	0
グングン	0	1	0	0	0	1	0
メソッド	0	1	0	0	1	0	0
叱る	0	1	0	0	1	1	0
学ぶ	0	0	0	1	1	0	0
人間	0	0	1	1	0	0	0
子育て	0	0	0	1	1	1	1
自立	0	0	0	0	1	1	1
習慣	0	0	0	0	1	1	0
母親（母・ママ等）	1	1	1	1	1	1	0
父親（父・パパ等）	0	0	0	1	1	1	1
女の子	0	0	0	0	1	1	0
男の子	0	0	0	0	1	1	0
伸（ばす・びる）	0	1	0	1	1	1	0
決まる	0	1	0	0	1	0	0
教える	1	1	1	0	1	1	0
先生（教師）	1	1	1	0	1	0	0
自分	1	0	1	1	1	1	0
算数	0	0	0	0	1	1	0

表9をもとに、数量化理論Ⅲ類による散布図が以下の図1と図2である。

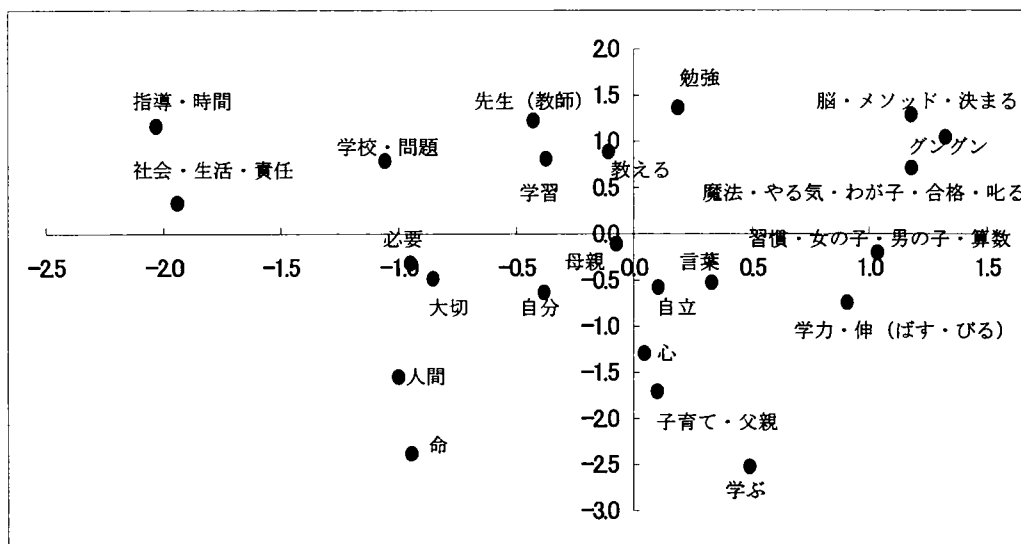


図1 重複している頻出語の散布図 (サンプル数量の散布図)

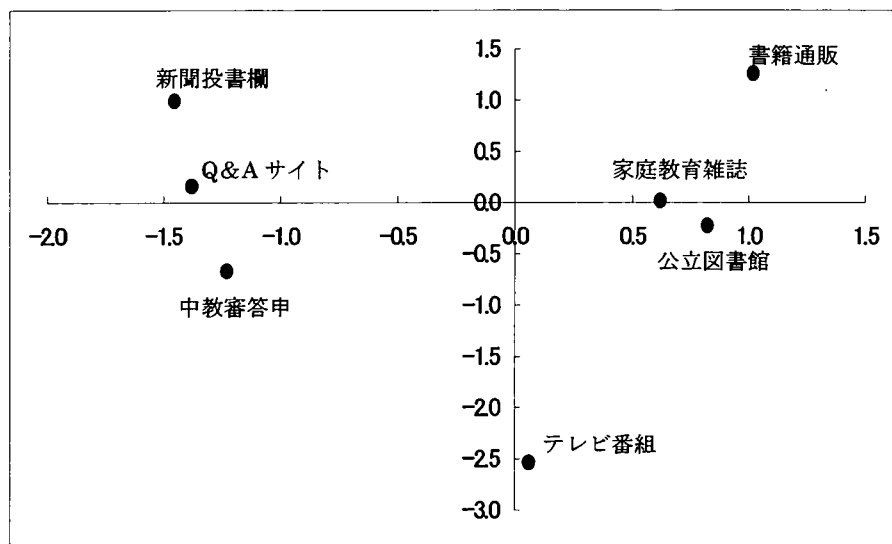


図2 各種メディアの散布図 (カテゴリー数量の散布図)

図1の散布図にみる重複している頻出語のそれぞれの位置と、図2の各種メディアの散布図とを対比することにより、メディアによる傾向がみえてくる。例えば、新聞投書欄やQ & A サイトの近似には、「指導・時間」「社会・生活・責任」や「学校・問題」といった頻出語が位置しており、書籍通販の近似には、「脳・メソッド・決まる」といった頻出語が位置している。

上記の「各種メディア」と「重複している頻出語」の対比を、より一層明確にするため、

それらを群（クラスター）に分けて考察する必要があると考える。

そこで、階層的クラスター分析を行う。ここでは、比較的安定した解が得られる手法とされるウォード法により行う。

まず、各種メディアのクラスターを確認しておきたい。以下の図3がその階層図である。

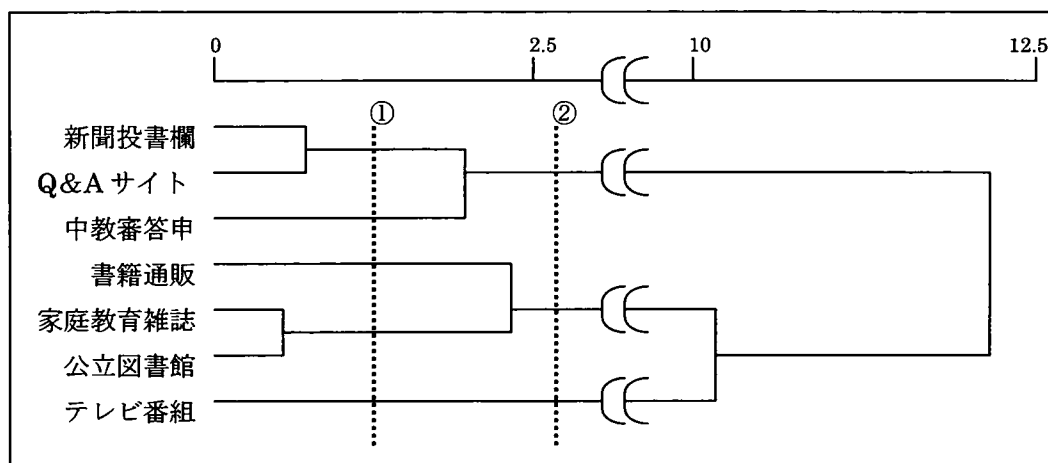


図3 各種メディアのクラスター分析による階層図

図3によると、本研究で取りあげた7つのメディアについて、図中の①のラインで分けると、5つのグループに分けられる。1つ目は「新聞投書欄」と「Q&A サイト」。2つ目は「中教審答申」。3つ目は「書籍通販」。4つ目は「家庭教育雑誌」と「公立図書館」。そして5つ目は「テレビ番組」となる。また、図中の②のラインで分けると、3つのグループに分けられる。1つ目は「新聞投書欄」「Q&A サイト」「中教審答申」。2つ目は「書籍通販」「家庭教育雑誌」「公立図書館」。そして3つ目が「テレビ番組」となる。

図中①のライン分けからは、「新聞投書欄」と「Q&A サイト」が同グループということで、ともに投稿者という繋がりがうかがえる。また、図中②のライン分けからは、「書籍通販」「家庭教育雑誌」「公立図書館」の3つが同じグループということで、ともに出版物という繋がりがうかがえる。

次に、以下の図4に重複している頻出語のクラスター分析による階層図を示す。ここでもウォード法により、各頻出語のグループ分けを行う。

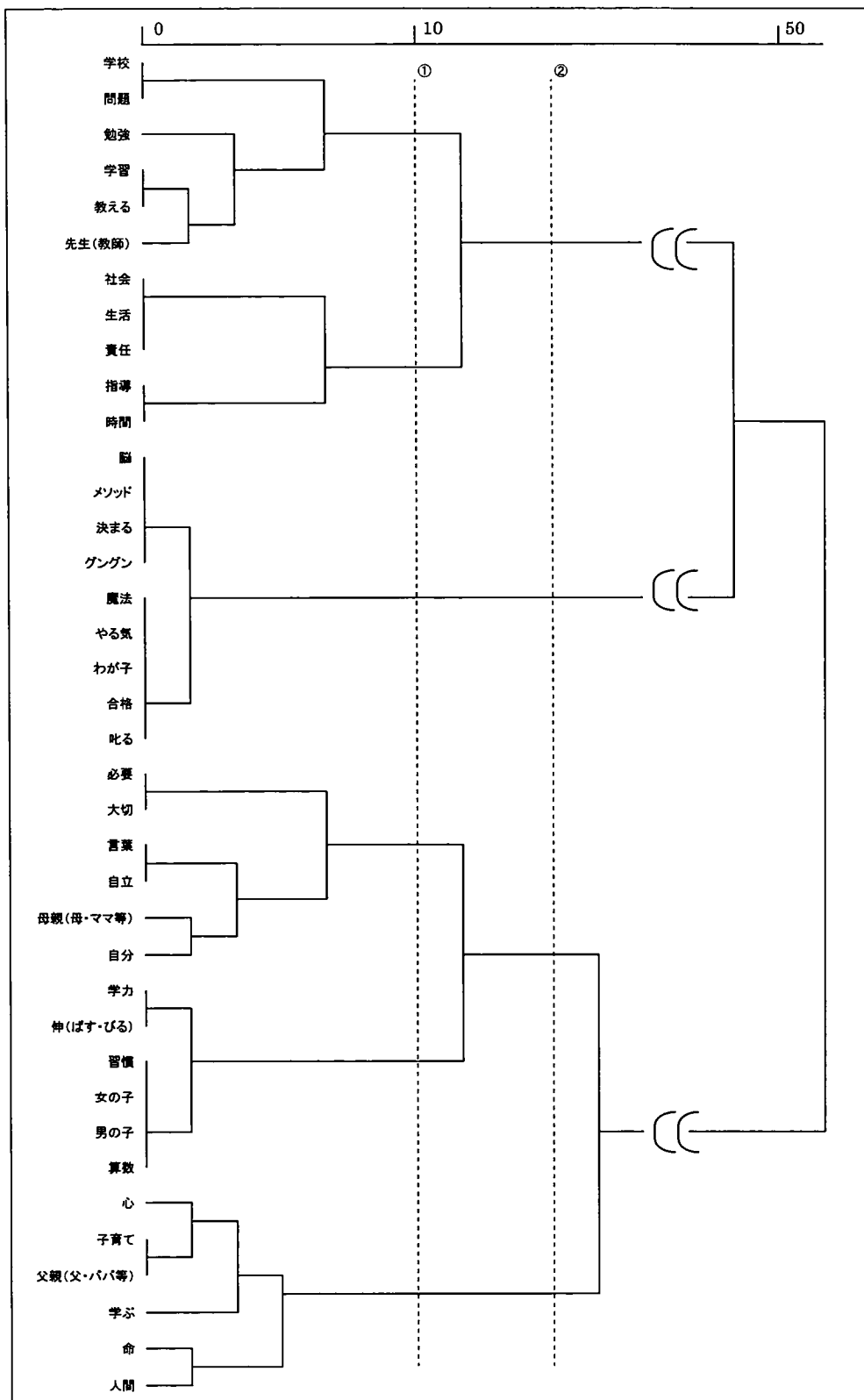


図4 クラスター分析による重複テキストの階層図

図4によると、本研究で抽出した重複している頻出語の38語が図中の①のラインで分けると、6つのグループに分けられ、図中の②のラインで分けると、4つのグループに分けられる。図中①のライン分けによる6グループは以下の表10のとおりである。

表10 図中①ライン分けによる6グループ

第1グループ	学校. 問題. 勉強. 学習. 教える. 先生 (教師).
第2グループ	社会. 生活. 責任. 指導. 時間.
第3グループ	脳. メソッド. 決まる. グングン. 魔法. やる気. わが子. 合格. 叱る.
第4グループ	必要. 大切. 言葉. 自立. 母親 (母, ママ等). 自分.
第5グループ	学力. 伸 (ばす, びる). 習慣. 女の子. 男の子. 算数.
第6グループ	心. 子育て. 父親 (父, パパ等). 学ぶ. 命. 人間.

また、図中②のライン分けによる4グループは以下の表11のとおりである。

表11 図中②ライン分けによる4グループ

第1グループ	学校. 問題. 勉強. 学習. 教える. 先生 (教師). 社会. 生活. 責任. 指導. 時間.
第2グループ	脳. メソッド. 決まる. グングン. 魔法. やる気. わが子. 合格. 叱る.
第3グループ	必要. 大切. 言葉. 自立. 母親 (母, ママ等). 自分. 学力. 伸 (ばす, びる). 習慣. 女の子. 男の子. 算数.
第4グループ	心. 子育て. 父親 (父, パパ等). 学ぶ. 命. 人間.

上記の表10と表11を対比すると以下の表12となる。

表12 表10と表11の対比

表10の各グループ	表11の各グループ
第1グループ	第1グループ
第2グループ	
第3グループ	第2グループ
第4グループ	第3グループ
第5グループ	
第6グループ	第4グループ

表11と表12の各グループ分けを、図1の散布図上でそれぞれ円で囲むと下記の図5、図6ようになる。また、各種メディアとの位置関係が分かるように、各図中にそれぞれのメディアを付記した。

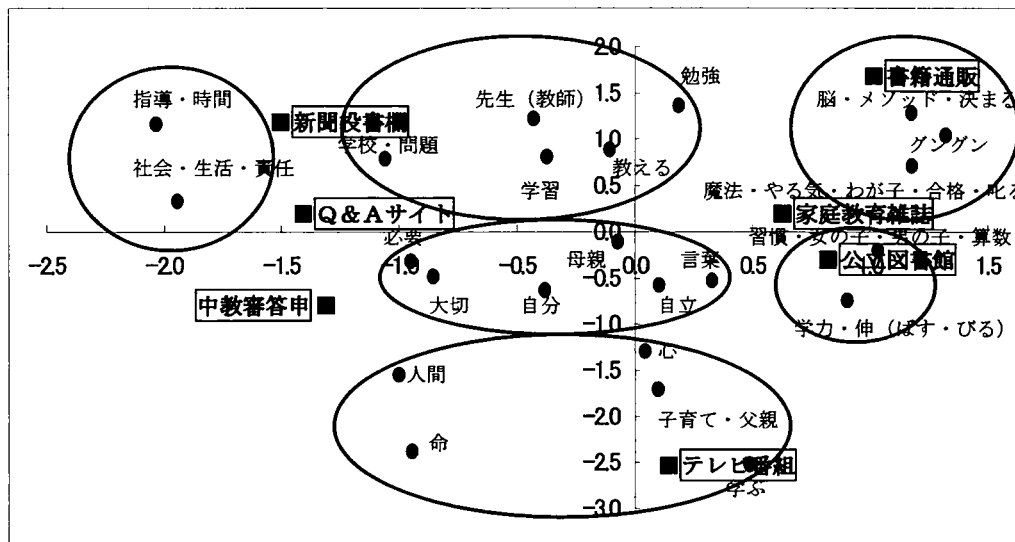


図5 6グループ分け(図1の重複している頻出語の散布図より)

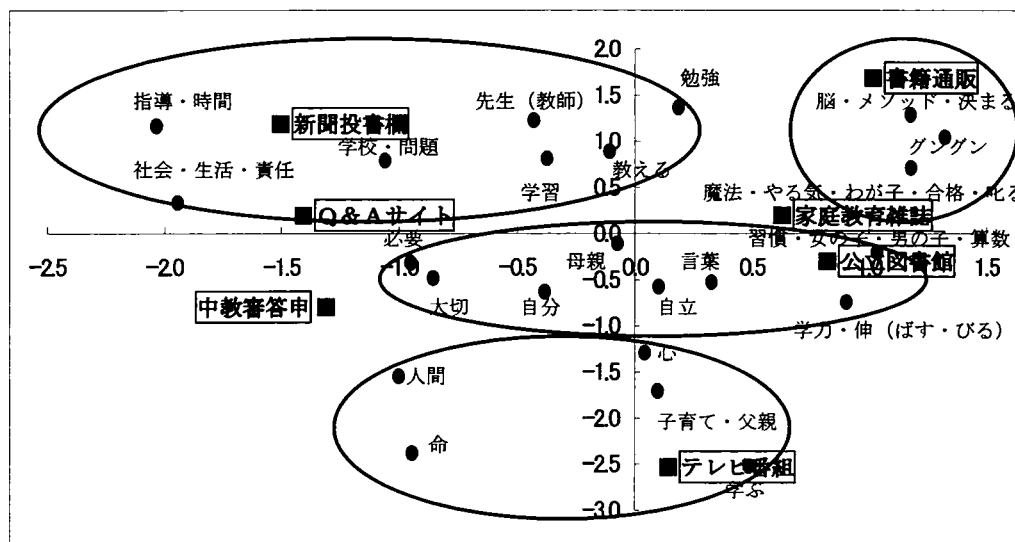


図6 4グループ分け(図1の重複している頻出語の散布図より)

第3節 分析結果からの考察

ここでは、先の第2節の各表各図からの考察を行う。

具体的には、図1と図2の散布図と表11の4グループ分けを同時布置した以下の図7をもとに考察を行う。

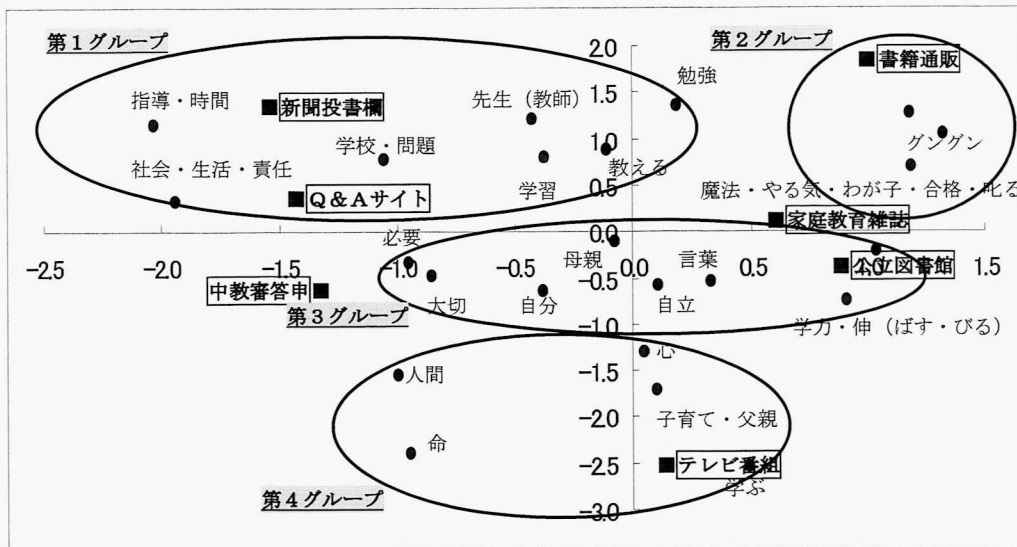


図7 重複テキストと各種メディアを同時布置した散布図

図7の第1グループ（表11の第1グループの語群）の円枠内に、「新聞投書欄」「Q&Aサイト」が位置している。社会規範の育成が求められている家庭と学校、そしてその育成を求める社会や世間という側面の強いこれらの一群を「社会規範群」と名づけ（命名の理由については後述、他の群についても同様）、第2グループ（表11の第2グループの語群）の円枠内に「書籍通販」が位置し、家庭学習の方途や子育ての方法というマニュアル的な面が際立つこれらの一群を「教育戦略群」と名づけたい。また、図7の第3グループ（表11の第3グループの語群）の円枠内に「公立図書館」が、円枠上に「家庭教育雑誌」が位置し、家庭における学習習慣や、親と子のライフスタイルに軸足を置いたこれらの一群を「生活習慣群」と名づけ、第4グループ（表11の第4グループの語群）の円枠内に「テレビ番組」が位置し、演繹的に家庭や親子のあり方などを説き諭す、これらの一群を「情操育成群」と名づけたい。

なお「中教審答申」については、第1、第3、第4グループの各円枠外、ほぼ均等の位置にあり、関連する群を1つに定めることができないが、これら3つのグループとやや強い関係といえる。また、「公立図書館」「家庭教育雑誌」については、ともに第2グループの円枠に近くこれらもやや強い関係といえる。

上記の4つの群と各種メディアとの関係を実線（強い関係）と破線（やや強い関係）で示すと図8のとおりとなる。

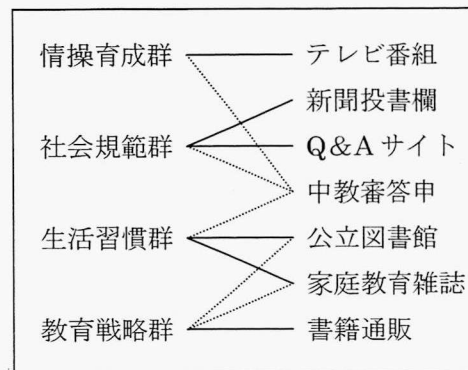


図8 各群と各種メディアとの関係

「家庭教育」という言葉に対してもつ各種メディアの視点（捉え方）に、明らかな違いのあることが図8に示された。

ここで、上記の各群の命名について論考を加えたい。まず、「社会規範群」についてであるが、社会規範の定義を小林（1991）は「ある地位にいる行為者がある状況で行う、望ましい行為についての命題である」（小林 1991,p.38）としている。この群（第1グループ）での言葉は「学校」「問題」「勉強」「学習」「教える」「先生（教師）」「社会」「生活」「責任」「指導」「時間」の11語である。これらのうち、例えば「問題」や「社会」、そして「責任」といった言葉からは、「望ましい行為」を求めるという意味合いを、そして、「学校」「勉強」「教える」「先生（教師）」「指導」といった言葉からは、「望ましい行為」が求められるという意味合いを感取することができる。そこで、この群を「社会規範群」と命名した。この群からは、求め求められる「望ましい行為」についての言葉を伴う「家庭教育」という言葉の一側面を確認することができた。

次に、「教育戦略群」についてであるが、学歴獲得競争の市場における家族のとり教育戦略を片岡（2001）は、「第1に、家庭環境を通じて文化資本（cultural capital）を相続する文化的再生産論の文脈からみた、家族の文化的戦略、第2に、塾や予備校などの学校外教育投資戦略、第3に、子ども数を減らすことによって、子ども1人当たりの教育投資を最大化する少子化戦略など」（片岡 2001,p.259）としている。この群（第2グループ）での言葉は「脳」「メソッド」「決まる」「グングン」「魔法」「やる気」「わが子」「合格」「叱る」の9語である。これらのうち、例えば「メソッド」や「魔法」、そして「グングン」や「やる気」といった言葉からは家庭の文化的戦略といえる意味合いが、「決まる」や「合格」といった言葉からは学習効果（投資戦略に繋がる）という意味合いを感取することができる。そこで、この群を「教育戦略群」と命名した。この群からは、「家庭教育」という言葉に、家庭における戦略的側面をあらわす言葉が伴うということが確認できた。

次に「生活習慣群」についてであるが、久世（1980）は、生活習慣を、日常生活に必要な行動が一定の型で繰り返し行われ、人が健康で文化的な規律ある生活を日々滞りなく送っていくための基礎となるものとしている。この群（第3グループ）での言葉は「必要」「大切」「言葉」「自立」「母親（母、ママ等）」「自分」「学力」「伸（ばす、びる）」「習慣」「女の子」「男の子」「算数」の12語である。これらのうち、例えば「言葉」や「自立」といった言葉からは日常生活の中で培われるものという意味合いが窺われ、「自分」「学力」「伸（ばす、びる）」「習慣」「算数」などの言葉からは、家庭での学習習慣を身につけるという意味合いが感取される。そこで、この群を「生活習慣群」と命名した。この群からは、「家庭教育」という言葉に、生活習慣（学習習慣を含む）を育むという側面が伴いあらわれていることが確認できた。

最後に「情操育成群」についてであるが、ここで使う情操育成という言葉は「豊かな情操を育成する」という文の短縮形といえる。情操教育という言葉が存在するが、それは一般に芸術教育（とくに学校教育において）と結びつけてとらえられる傾向が強い（増田 2006）

とされる。そこで、教育という言葉を育成（育み成長させる）とした。この群（第4グループ）での言葉は「心」「子育て」「父親（父、パパ等）」「学ぶ」「命」「人間」の6語である。これらのうち、例えば「心」「命」そして「人間」などから、情操を育むことに結びつく意味合いが感取される。そこで、この群を「情操育成群」と命名した。この群からは、「家庭教育」という言葉に、情操を育み成長させるという側面があることが確認された。

ここでは上記のとおり4つの群に分けたが、もちろん、もっと細かな分類を行うことも、また、その類型についてさまざまな提示を行うことも可能であると考えられるが、それについては今後の課題としたい。

第4節 本章のまとめ

第3章では、数量化理論Ⅲ類を利用するとともにクラスター分析を施し、「家庭教育」という言葉に伴って現れる重複テキスト（複数のメディアに表出する）をもとに、各メディアの相関分析を行ってきた。

「家庭教育」という言葉については、諸辞典においてさまざまに記されているが、教育学用語辞典で高野（2006）は冒頭「学校教育，社会教育と並ぶ教育機能の1つであり，家庭において親などが子におこなう教育を総称していう。」（高野 2006,p.45）としている。親などが子におこなう教育を総称して「家庭教育」としているわけであるが、第3節でみたとおり、「家庭教育」を「情操育成」として捉える面もあれば「社会規範」として捉える面もあり、また、「生活習慣」として捉える面もあれば「教育戦略」として捉える面もある。各種メディアがそれぞれに「家庭教育」の概念を一面から捉え言説を展開している。

『家庭教育』という用語を使いつづけることは、もはや困難なのではないか（太田 2012,p.336）といわれる。「家庭教育」という言葉のもつ諸概念には「情操育成」「社会規範」「生活習慣」「教育戦略」がある。しかし、それらは「家庭教育」という言葉を語るときに、また語る場においてどの概念で使用するのかは選択されている。このことは、太田（2012）のいう使いつづけることの困難さを示しているともいえる。

終 章 「家庭教育」という言葉の多義性

「家庭教育」という言葉の意味内容（概念）に焦点をあて、本研究をすすめてきた。第1章第1節では、「家庭教育」という言葉の誕生から包含されていた二面性（「徳育」・「知育」）を示し、第2節では、「家庭教育」の変遷を辿る中で、その誕生以前における「家業」に対する必要性としての「しつけ」、明治期における親の教育権への国の関与とその独占、大正期における「教育する家族」の登場、昭和前期から戦中における学校教育の補完補強としての「家庭教育」の位置づけを確認した。さらに、戦後から現代へ「大衆教育社会」における「家庭教育」の二層（生活優先層と教育熱心層）の存在と拡大を確認した。第3節では、「家庭教育」の諸問題として「教育の私事化」と「ペアレントクラシー」の伸張を、そして「家庭の教育力の低下」という言説の背景にある社会的圧力を確認した。第1章で明らかとなったのは、「家庭教育」という言葉にはさまざまな意味内容（概念）が含まれているということである。それは、「家庭教育」という言葉のもつ意味合いが、時に「徳育」であり「知育」であり、時に「しつけ」であり「学校教育の補完」であるという点などである。「多義性の存在を明るみにする」という本研究の課題に対して、歴史的な背景と現代における諸状況からのアプローチができた、と考える。

次に、第2章では、「家庭教育」という言葉のもつ意味内容（概念）の明確化を目指す意味から、さまざまな情報を伝達する媒体としてのメディアを研究対象とした。そこでは、メディアによって、それぞれに特徴があり、そのことから「家庭教育」という言葉に対する意味合いに違いがあることが明るみとなった。そして、メディアごとの近似と相違のあることも明るみとなった。

最後に、第3章において、上記のメディアごとの近似と相違をもとに、分類化（類型化）を試みた。結果、4種類の群（クラスター）に分けることができるのではないかと、この結論に至った。

新教育社会学辞典では、「家庭教育」という言葉は「家庭の中で子どもに対して行われる教育」（牧野 1986,p.120）とされ、つづけて、狭義にはしつけや訓練、指導などの形で意図的に行う教育的働きかけを、広義には家庭の生活様式や雰囲気など、子どもが自然に体得していくような無意図的な形成作用を含めて用いられる、としている。ここに「家庭教育」という言葉のもつ多義性の存在がみてとれる。それは、狭義と広義に分けた上での記述もそうであるが、意図的な働きかけと無意図的な形成作用、しつけ・訓練・指導と自然な体得という対照的な事象の併記である。

本稿においては、各種メディアごとに「家庭教育」を捉えるそのパースペクティブ（観点）の特徴とその差異に注目することで、上記とは違った視点から多義性の存在を確認することができた。各種メディアの差異は、「家庭教育」という言葉のもつ多義性を生じさせる（させた）原因ともいえ、逆に、多義性によって生じた（ている）結果ともいえる。西川（1996）は、社会言語学のアンケートをとおして、あるべき「家庭」の規範性は強い、

とし、日本型近代家族をあらわす行政語として用いられた「家庭」という言葉が、しだいにコノテーション（共示）の複雑な、規範性の強い言葉になったことを指摘している。手法は違うが、本稿においては「家庭教育」という言葉について、コノテーションの複雑さの存在を確認することができた。

『『家族とは何か』という問に対する回答は『誰にとっての家族か』で異なる』（目黒1987,p.65）とされるが、このことは「家庭教育とは何か」という問いに対してもいえる。

「誰にとっての家庭教育か」で異なる回答が発せられることは、本稿でみた各種メディアによる「家庭教育」という言葉の捉え方の違いからも明らかである。本稿では、各種メディアの差異に着目した多義性の析出を行うことで、「家庭教育」という言葉に外延する意味領域の類型を明らかにすることができた。

以下に、「家庭教育」への新たな視座を提示する本稿の知見を2点にまとめた。

まず第1に、「家庭教育」という言葉は外延する場（ここでは各種メディア）によって、意味の捉え方に明らかな違いがあり、そのことが多義性の内包を示している。このことは「家庭教育」が論じ語られている場面（紙面、誌面、画面、書面など）に接する時に、内包されている多義性のうちのどの意味が、そこで使われているのかを峻別する必要があることを示している。

第2に、「家庭教育」という言葉は「情操育成」「社会規範」「生活習慣」「教育戦略」といった意味領域に分類することが可能であり、「規範性」的な側面と「戦略性」的な側面を有している。このことは「家庭教育」という言葉が四面体構造であり、どの面が伝えられるのかは、「規範」を問うのか「戦略」を問うのかというスタンスの相違に留意することで可能になることを示している。

上記に示した知見のそれぞれについて考察を加えたい。まず、使われる場（「家庭教育」という言葉が）による意味の相違に対するその峻別の必要性についてである。「家庭教育」における「不安」や「焦り」をあおる情報源のひとつにメディアがあることをまず認識したい。その上で、メディアにもさまざまな形態があり、それぞれ違った意味（「家庭教育」という言葉のもつ）を発信していることをふまえて受信することの必須を確認したい。例えば、新聞投書欄で語られる“規範性”を求める「家庭教育」を、ベストセラー書籍で語られる“子育てマニュアル”的な視点での「家庭教育」と混同してはならないということである。「しつけ」の欠如をなげく投書が掲載され、そこから家庭教育ができていないとの論調が展開されたとしても、それは親の「家庭学習」に対する取り組みが足りていないという認識に移行してはならず、また、逆に各家庭における学校外教育への投資行動の高まりを感じさせる家庭教育雑誌の記事に触れたとしても、それは行政面からの「家庭教育」へのサポートを減らすことができると捉えてはならないということである。

次に、「家庭教育」という言葉を四面体構造として、規範性からとらえるのか、戦略性からとらえるのかというスタンスの違いに留意する点についてである。「家庭教育」という言葉が、その登場から二面性（「徳育」と「知育」）をもっていたことは、第1章で記したと

おりである。また、「家庭教育」という言葉に多義性が存在することは、各種メディアの分析をととして第2章、第3章で示したとおりである。そして、各種メディアによる偏向から「社会規範群」「教育戦略群」「生活習慣群」「情操育成群」への分類を行った。以前より、「家庭教育」という言葉には、「しつけ」という生活習慣を通じ社会規範を養うという面があり、「豊かな心を育む」という情操を培う面があることはいわれてきた。しかし、教育戦略という面が付加されてきたのは、いつごろからなのか。おそらく、60年代の「家庭教育ブーム」の時期にその萌芽があり、70年代の「教育ママ」という造語の時期にその成長が促進され、2005年から2007年にかけて登場した家庭教育雑誌のあいつぐ創刊の時期に「家庭教育」という言葉について「教育戦略」という意味が内包されたのではないかと考える。ベストセラー書籍や家庭教育雑誌が、購読者層のニーズにあわせニーズを喚起しニーズを増産するなかで、「家庭教育」という言葉に「教育戦略」という意味を内包させるにいたったのではないかと考える。

私たちを包み込むメディア空間は、つねに多様性をましながら拡大をつづけている。そんななかにあつて「家庭教育」という言葉もまたその影響を受けながら多義性を存続させつつ、新たな意味合いを加えていくかもしれない。その時には、各種メディアごとのバイアス（偏り）を正しく認識できる判断力と眼識をもつてのぞんでいきたい。本稿では、各種メディアの分析から「家庭教育」という言葉にせまったわけであるが、せまるにはあまりにも膨大なメディア（媒体）の種類とデータ量の存在があり、その一部でもってしか分析に臨めなかったをご了承ください。

今後の課題として挙げられるのは、各種メディアの対象層との相関関係を加えた分析と時代ごとの意味領域の振幅を捉えた時系列解析である。本研究で用いた計量テキスト分析からだけではなく、さまざまな分析方法を駆使して「家庭教育」という言葉のもつ多義性を精査することでその起因にせまりたい。また、多義性による影響についても研究の沃野は広がっていると考え、さらなる研究課題として位置づけたい。

注

- (1) 赤川 (2006) は、言説が生産される「場」のありようを言説分析における重要なものとしている。
- (2) ハーバーマス (1968) は、その著『認識と関心』の中で、意味を理解する上で「われわれは、表出の運用を理解しなければならない」としている。
- (3) テキストマイニングについては、樋口 (2004) のKH Coderを利用。
- (4) 『家庭叢談 第九号』(1876年10月発行)。福沢諭吉によって刊行された雑誌『家庭叢談』により、「家庭」という言葉が広く使われるようになったとされている。
- (5) 福沢諭吉, 1876 (=中村敏子編, 1999, 『福沢諭吉家族論集』岩波書店) を参照。
- (6) 学事諮問会 (1882年11月21日から12月15日までの25日間) が開催され、その中で提示されたのが『文部省示諭』である。
- (7) 「学校は主として智的教育を為し、家庭は主として道徳的教育を施す」(pp.151-152) (明治39年発行: 『家庭之教育』日本済美会編 東海堂/参照 国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/812457/326>)
- (8) イギリスと日本の比較から後発効果を実証したドーア (1976) は、「1870年頃には、各年齢層の男子の40-45%, 女子の15%が日本語の読み書き算数を一応こなし、自国の歴史、地理を多少はわきまえていた」(Dore, 1976p.55) としている。
- (9) 広田 (2001) によると、戦後日本に出現した「大衆教育社会」は「教育する家族」をあらゆる階層へと拡大させ、どこ家庭でもわが子の成績を気にする学力一辺倒の時代を創出した、としている。
- (10) 「近代日本教育関係法令体系」編著者 米田俊彦 (出版社 港の人) 2009 を参照。
- (11) 作田啓一がいち早く注目した、人類学者ルネ・ジラルの三者関係の理論。欲望は主体と対象との二者関係の間ではなく、主体者が媒介者を模倣するという、主体・対象・媒介者の三者関係において発生するという見方。
- (12) 放送法の指定を受けた唯一の放送番組専門アーカイブ施設である放送ライブラリー (<http://www.bpcj.or.jp/>) は、公益財団法人 放送番組センターの事業の一つ。
- (13) 『日経キッズプラス』(日経ホーム出版, 2005年10月), 『エデュ』(小学館, 2006年3月), 『プレジデント Family』(プレジデント社, 2006年7月), 『AERA with Kids』(当時・朝日新聞社, 2007年3月) など。
- (14) 日本図書館協会図書館政策特別委員会により、1989年1月確定公表、2004年3月改訂されたもの。 (<http://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/236/Default.aspx>) 第2章 市(区)町村立図書館, 3. 図書館資料36より抜粋。
- (15) 統計数理研究所元所長の林知己夫によって1940年代後半から50年代にかけて開発された日本独自の多次元データ分析法である数量化理論のうち、主成分分析あるいは因子分析に対応しているのが数量化Ⅲ類。ここでは、フリーソフト (KTS&C) 菊池富男 (<http://ktsc.cafe.coocan.jp/>) を利用した。また、クラスター分析についても同ソフトを利用。
- (16) 各種メディアに重複する抽出語のうち、「家庭」「教育」「親」「子供 (子・子ども)」「親子」など

を除き、また、同じ意味を表す（と考えられる）言葉（例えば、「父親」「父」「パパ」など）は1つにまとめる処理を行い、上位語より38語を抽出した。なお、「条例」という言葉については、新聞投書欄及びQ&Aサイトに現れているが、対象期間内における条例改正案などに対する意見や質問であるため省いた。また、「力」「自分」という言葉についても、何に対するものかなど不確定であるため省いた。

引用参考文献

- 赤川 学, 2001, 「言説分析と構築主義」『構築主義とは何か』編 上野千鶴子 勁草書房。
- 赤川 学, 2006, 『構築主義を再構築する』勁草書房。
- 阿部 彩, 2008, 『子どもの貧困』岩波新書。
- 荒木博之, 1973, 『日本人の行動様式』講談社現代新書。
- 井川充雄, 2005, 『新聞・雑誌・出版』編 山本武利 ミネルヴァ書房。
- 石川由香里, 2011, 『格差社会を生きる家族』著 石川由香里. 杉原名穂子. 他 有信堂高文社。
- 石田英敬, 2003, 『記号の知／メディアの知』東京大学出版会。
- 伊藤高史, 2005, 『図説 日本のマスメディア』編著 藤竹 暁 日本放送出版協会。
- 伊藤高史, 2006, 『メディア産業論』著 湯浅正敏. 他 有斐閣。
- 伊藤めぐみ, 2002, 「文部（文部科学）省による家庭教育『奨励』施策の歴史的変遷と問題点」『家政学原論研究』36, pp.50-56.
- 岩崎豪人, 1998, 「情報化社会におけるコミュニケーションの変質とモラル」『京都大学文学部哲学研究室紀要：Prospectus』1, pp.48-66.
- 岩村暢子, 2005, 『〈現代家族〉の誕生』勁草書房。
- 梅景優子, 2007, 「新しい家庭教育雑誌を読む」『教育』737, pp.20-27.
- 梅景優子, 2010, 『図説 教育の論点』編 久富善之. 長谷川裕. 山崎鎮親 旬報社。
- 大石 裕, 2006, 『コミュニケーション研究 第2版』慶應義塾大学出版会。
- 太田素子, 1994, 『江戸の親子』中公新書。
- 太田素子, 2011, 『近世の「家」と家族』角川学芸出版。
- 太田素子, 2012, 『保育と家庭教育の誕生』編 太田素子. 浅井幸子 藤原書店。
- 岡井崇之, 2012, 「メディアと社会変容をめぐる新たな視座」『東洋英和大学院紀要』8, pp.25-37.
- 岡崎友典, 2004, 『家庭・学校と地域社会』放送大学教育振興会。
- 岡本朝也, 2004, 「『教育家族』と学校 ― その問題点と成立史」『現代家族のアジェンダー親子関係を考える』編 井上真理子 世界思想社。
- 奥村典子, 2009, 「家庭教育振興政策における『学校教育一任の傾向』の問題―学校教育と家庭教育の関係めぐるって」『教育史学会紀要』52, pp.30-42.
- 尾崎ムゲン, 1999, 『日本の教育改革』中公新書。

- 小塩隆士, 2002, 『教育の経済分析』 日本評論社。
- 小野征夫, 2010, 「教育史における家族・家庭」『教育史学会紀要』 53, pp.132-133.
- 香川めい, 2014, 『〈高卒当然社会〉の戦後史』 共著 児玉英靖・相澤真一 新曜社。
- 柏木恵子, 2001, 『子どもの価値』 中央公論社。
- 片岡栄美, 2001, 「教育達成過程における家族の教育戦略」『教育學研究』 68(3), pp.259-273.
- 片岡栄美, 2011, 『〈教育〉を社会学する』 編 北澤 毅 学文社。
- 荻谷剛彦, 1995, 『大衆教育社会のゆくえ』 中央公論社。
- 神原文子, 2010, 「家族と教育」『現代教育社会学』 編 岩井八郎・近藤博之 有斐閣。
- 木村 元, 1990, 『〈教育〉—誕生と終焉』 編 編集委員会 藤原書店。
- 木村 元, 2015, 『学校の戦後史』 岩波新書。
- 久世妙子, 1980, 「生活習慣」『児童学事典』 編 松村公平・浅見千鶴子 光生館 pp.155-156.
- 小玉亮子, 2010, 「〈教育と家庭〉研究の展開」『家族社会学研究』 22(2), pp.154-164.
- 小泉吉水, 2009, 『江戸に学ぶ子育て人づくり』 角川 S S コミュニケーションズ。
- 小林久高, 1991, 「社会規範の意味について」『社会学評論』 42(1), pp.32-46.
- 駒村康平, 2009, 『大貧困社会』 角川 S S コミュニケーションズ。
- 小室広佐子, 2007, 『日本のマスメディア』 著 柏倉康夫・佐藤卓己・小室広佐子 NHK出版。
- 小山静子, 1999, 『家庭の生成と女性の国民化』 勁草書房。
- 小山静子, 2002, 『子どもたちの近代』 吉川弘文館。
- 桜井智恵子, 2005, 『市民社会の家庭教育』 信山社。
- 桜井智恵子, 2012, 『子どもの声を社会へ』 岩波新書。
- 佐藤昭宏, 2013, 「保護者の教育不安と学校外教育選択～誰の不安が高まり、教育選択が変化したか～」
『第2回 学校外教育活動に関する調査報告(2013)』研究レポート4 ベネッセ教育総合研究所 pp.1-10.
- 佐藤卓己, 2007, 『日本のマスメディア』 著 柏倉康夫・佐藤卓己・小室広佐子 NHK出版。
- 沢山美果子, 2013, 『近代家族と子育て』 吉川弘文館。
- 柴崎正行, 1999, 「子育ての探求」『幼児の教育』 98(11), p.50, 98(12), pp.56-60, 99(5), pp.53-58.
- 諏訪哲二, 2007, 『なぜ勉強させるのか?』 光文社新書。
- 高野良子, 2006, 「家庭教育」『教育学用語辞典 第四版(改訂版)』 編集代表 岩内亮一他 学文社 p.45.
- 高橋 敏, 2007, 『江戸の教育力』 ちくま新書。
- 詫摩武俊, 1985, 『伸びてゆく子どもたち』 中公新書。
- 武田晃二, 1992, 「『文部省示諭』における『普通教育』概念」『岩手大学教育学部研究年報』 52(1),
pp.113-129.
- 千葉聡子, 2009, 『家族・都市・村落生活の近現代』 編 平野敏政 慶應義塾大学出版会。
- 千葉聡子, 2014, 「家庭教育が成立するための条件とは何か」『教育学紀要』 48, pp.47-59.
- 津田好子, 2013, 「教育テレビ番組『おかあさんの勉強室』が提示した母親規範」『東京女子大学紀要論
集』 64(1), pp.145-164.
- 天童睦子・高橋 均, 2011, 「子育てする父親の主体化」『家族社会学研究』 23(1), pp.65-76.

- 天童睦子, 2013, 「育児戦略と見えない統制」『家族社会学研究』25(1), pp.21-29.
- 中江和恵, 2003, 『江戸の子育て』文藝春秋。
- 中嶋 邦, 1995, 『現代家庭の創造と教育』編 日本女子大学女子教育研究所 ドメス出版。
- 中嶋 邦, 1996, 「近代日本における女子の家庭教育」『家と教育』編 井ヶ田良治他 早稲田大学出版部。
- 難波江和英, 2004, 『現代思想のパフォーマンス』共著 難波江和英・内田 樹 光文社新書。
- 西川祐子, 1996, 「近代国家と家族」『〈家族〉の社会学』編 井上俊 他 岩波講座 現代社会学 第19巻 岩波書店 p.93.
- 布川清司, 1996, 「近世民衆の家庭教育」『家と教育』編 井ヶ田良治他 早稲田大学出版部 p.59.
- 橋本嘉代, 2012, 『雑誌メディアの文化史』編 吉田則昭・岡田章子 森話社。
- 橋元良明, 2011, 『メディアと日本人』岩波新書。
- 樋口耕一, 2004, 「テキスト型データの計量的分析 ―2つのアプローチの峻別と統合―」『理論と方法』数理社会学会 19(1), pp.101-105.
- 樋田大三郎, 1993, 「プライバタイゼーションと中学受験」『教育社会学研究』52, pp.85-86.
- 広井多鶴子, 2009a, 「少子化をめぐる家族政策」『日本教育政策学会年報』16, pp.30-38.
- 広井多鶴子, 2009b, 『現代の親子問題 別巻 解説』著 広井多鶴子・小玉亮子 日本図書センター。
- 広田照幸, 1999, 『日本人のしつけは衰退したか』講談社現代新書。
- 広田照幸, 2001, 『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会。
- 広田照幸, 2003, 『教育には何ができないか』春秋社。
- 藤竹 暁, 2005, 『図説 日本のマスメディア 第二版』編著 藤竹 暁 NHK出版。
- 藤竹 暁, 2012, 『図説 日本のメディア』NHK出版。
- 藤田祐介, 2014, 『日本の教育文化史を学ぶ』編著 山田恵吾 ミネルヴァ書房。
- 堀尾輝久, 1997, 『現代社会と教育』岩波新書。
- 本田由紀, 2008, 『「家庭教育」の隘路』勁草書房。
- 本田由紀, 2006, 『「ニート」って言うな!』著 本田由紀・内藤朝雄・後藤和智 光文社。
- 増田 實, 2006, 「情操教育」『教育学用語辞典 第四版(改訂版)』編集代表 岩内亮一他 学文社 p.131.
- 松田美佐, 2014, 『うわさとは何か』中公新書。
- 松本洋人, 2013, 『子育て支援の社会学』新泉社。
- 水越 伸, 2011, 『21世紀メディア論』放送大学教育振興会。
- 三矢恵子, 2014, 「誕生から60年を経たテレビ視聴」『NHK放送文化研究年報2014』pp.7-44.
- 宮澤康人, 2011, 『〈教育関係〉の歴史人類学』学文社。
- 宮武実知子, 2003, 『戦後世論のメディア社会学』編 佐藤卓己 柏書房。
- 宮本みち子, 2012, 『若者が無縁化する』筑摩書房。
- 耳塚寛明, 2014, 『教育格差の社会学』編 耳塚寛明 有斐閣アルマ。
- 牟田和恵, 1996, 「日本型近代家族の成立と陥穽」『〈家族〉の社会学』編 井上俊 他 岩波講座 現代社会学 第19巻 岩波書店 p.61.
- 村上信明, 2005, 『図説 日本のマスメディア 第二版』編著 藤竹 暁 NHK出版。

- 目黒依子, 1987, 『個人化する家族』 勁草書房。
- 安野智子, 2006, 『重層的な世論形成過程』 東京大学出版会。
- 山田昌弘, 2013, 「日本家族のこれから」『社会学評論』 64(4), pp.649-662.
- 山本正身, 2014, 『日本教育史』 慶應義塾大学出版会。
- 山本敏子, 2012, 「倉橋惣三の『家庭生活の教育性』理論」『駒澤大学教育学研究論集』 28, pp.19-47.
- 山本敏子, 2014, 「明治期の学校管理法と『しつけ』の変遷(上)」『駒澤大学教育学研究論集』 30, pp.53-79.
- 湯浅俊彦, 2005, 『新聞・雑誌・出版』 編 山本武利 ミネルヴァ書房。
- 横田増生, 2013, 『中学受験』 岩波新書。
- 余田翔平, 2012, 「子ども期の家族構成と教育達成格差」『家族社会学』 24(1), pp.60-71.
- Brown, Ricard H., 1987, *Society as Text: Essays on Rhetoric, Reason, and Reality*, Chicago: University of Chicago Press. (=1989, 安江孝司・小林修一 共訳『テキストとしての社会—ポストモダンの社会像』 紀伊国屋書店.)
- Dore, Ronald D., 1976, *The Diploma Disease: Education, Qualification and Development*, London George Allen & Unwin Ltd. (=1978, 松居弘道 訳『学歴社会 新しい文明病』 岩波書店.)
- Foucault, Michel., 1969, *L'archéologie du savoir*, Gallimard. (=1981, 中村雄二郎 訳『知の考古学』 河出書房新社.)
- Garret,P.&Bell,A., 1998, Media and Discouse. Bell,A.&Garrett,P. (eds.) *Approaches to Media discourse*, Blacwell.
- Habermas, J., 1968, *Erkenntnis und Interesse*, Suhrkamp. (=1981, 奥山次良他 訳『認識と関心』 未来社.)
- Holloway, Susan D., 2010, *Women and Family in Contemporary Japan*, Cambridge University Press. (=2014, 高橋登他 訳『少子化時代の「良妻賢母」』 新曜社.)
- Kerckhove, Derrick De., 1995, *The Skin of Culture: investigating the new electronic reality*, Toronto: Somerville House Pub. (=1999, 片岡みい子・中澤豊 訳『ポストメディア論 — 結合知に向けて』 NTT 出版.)
- McLuhan, Marshall., 1964, *Understanding Media: The Extensions of Man*, McGraw-Hill. (=1987, 栗原 裕・河本仲聖 共訳『メディア論 — 人間の拡張の諸相』 みすず書房.)
- Polanyi, Michel., 1966, *The Tacit Dimension*, London. (=1980, 佐藤敬三 訳『暗黙知の次元』 紀伊国屋書店.)
- Wittgenstein, Ludwig., 1953, *Philosophische Untersuchungen*, ed. G. E. M. Anscombe and R. Rhees, tr. G. E. M. Anscombe, Basil Blackwell. (=1976, 藤本隆志 訳『哲学探究』 大修館書店.)

参考資料一覧

○「Amazon.co.jp」検索分類「家庭教育」のベストセラー100冊（書籍名・著者名）一覧（2014.8.20 10:30 時点）

1.	下剋上受験・両親は中卒 それでも娘は最難関中学を目指した！ 桜井信一
2.	ガミガミ叱らなくても大丈夫！子どもの「わがまま」で困ったときの言葉かけ PHP 研究所
3.	マンガでわかる よのなかのルール（単行本） 横山 浩之，明野 みる
4.	マンガでわかる 魔法のほめ方 PT: 叱らずに子どもを変える最強メソッド（単行本） 横山 浩之，明野 みる
5.	赤ちゃんに算数をどう教えるか（More gentle revolution）グレン ドーマン，ジャネット ドーマン，人間能力開発研究所，Glenn Doman, Janet Doman, 前野 律
6.	学力は家庭で伸びる—今すぐ親ができること 41（小学館文庫） 陰山 英男
7.	入学準備 陰山メソッド 小学校でつまづかない「もじ」と「かず」家庭ワーク 正司 昌子，陰山 英男
8.	お母さんの「敏感期」—モンテッソーリ教育は子を育てる、親を育てる（文春文庫） 相良 敦子
9.	赤ちゃんの運動能力をどう優秀にするか—誕生から6歳まで（More gentle revolution）グレン ドーマン，ブルース ヘイギー，ダグラス ドーマン，人間能力開発研究所，Glenn Doman, Bruce Hagy, Douglas Doman, 前野 律
10.	「心の基地」はおかあさん—やる気と思いやりを育てる親子事例集（子育てシリーズ） 平井 信義
11.	できる子はノートがちがう！—親子ではじめるマインドマップ トニー・ブザン
12.	金持ち父さんの子供はみんな天才 — 親だからできるお金の教育 ロバート・キヨサキ，シャロン・レクター，白根 美保子
13.	考える力がつくフォトリディング 山口 佐貴子 照井 留美子，リネット・アイレス
14.	3~4歳の右脳+左脳ドリル 市川 希
15.	「甘えさせ上手」なお母さんがやっていること 『PHPのびのび子育て』編集部
16.	忘れてなんかない！ ディスレクシア—読む書く記憶するのが困難なLDの子どもたち 品川 裕香
17.	子どもの教育（Adlerian Books）アルフレッド アドラー，Alfred Adler, 岸見 一郎
18.	七歳までは夢の中—親だからできる幼児期のシュタイナー教育 松井 るり子
19.	小3までに育てたい算数脳 高濱 正伸
20.	やる気スイッチが入る 秋田県式家庭学習ノートで勉強しよう！ 主婦の友社
21.	いじめない力、いじめられない力 60の“脱いじめ”トレーニング付 品川 裕香
22.	天才脳を育てる1歳教育—まだ間に合う久保田メソッド— 久保田 競
23.	御三家・灘中合格率日本一の家庭教師が教える 頭のいい子の育て方 西村 則康
24.	高嶋式 子どもの字がうまくなる練習ノート—おうちでできるえんぴつのかきかたトレーニング。親しみやすい手書きのお手本 高嶋 喩
25.	ユダヤ式学習法—わが子の学力がグングン伸びる 坂本 七郎
26.	子どもの成績を決める「習慣教育」（PHP文庫） 今村 暁
27.	「ほめ方」「叱り方」「しつけ方」に悩んだら読む本 若松 亜紀 佐々木 正美
28.	なぜ勉強するのか？[ソフトバンク新書] 鈴木 光司
29.	見逃さないで！ 子どもの心のSOS 思春期に がんばってる子 明橋大二，太田知子
30.	小3までに「勉強グセ」をつける法—親の「教育力」次第で子どもの学力はいくらでも伸びる！（KOU BUSINESS）和田 秀樹
31.	「ヨコミネ式」天才づくりの教科書 いますぐ家庭で使える「読み・書き・計算」の教材 横峯 吉文
32.	[七田式] 子どもの『天才脳』をつくる33のレッスン（じっぴコンパクト新書） 七田 厚
33.	男の子がやる気になる子育て 川合 正
34.	みんなといっしょにDo!キッズワーク—2・3・4歳（ワントのやってみようBOOK） 伸芽会教育研究所
35.	世界的脳外科医・林成之先生の「文武両脳」の育て方（eduコミュニケーションMOOK） 小学館
36.	バイリンガル教育の方法—12歳までに親と教師ができること 中島 和子
37.	子どもが育つ条件—家族心理学から考える（岩波新書） 柏木 恵子
38.	秋田県式家庭学習ノート—勉強グセと創造力が身につく 主婦の友社
39.	お父さんが教える 自由研究の書きかた 赤木かん子
40.	親が子どもに教える「一番大切なこと」—1日5分「やる気」の習慣 今村 暁
41.	文章題がわかる（続）（ドラえもん学習シリーズ—ドラえもん算数おもしろ攻略） 小林 敦治郎
42.	福澤諭吉 家庭教育のすすめ 渡辺 徳三郎
43.	小学生からの知育大百科 2014 完全保存版（プレジデントムック プレジデント Family）
44.	言葉ひとつで子どもが変わる 石川 尚子
45.	4~5歳の右脳+左脳ドリル 市川 希
46.	脳科学おばあちゃん久保田カヨ子先生の2~3才 頭のいい子に育つ育脳あそび—集団生活に入るまえに（主婦の友生活シリーズ） 久保田 競，久保田 カヨ子
47.	学力を伸ばす家庭のルール—賢い子どもの親が習慣にしていること 汐見 稔幸
48.	子どもの学力がグングン伸びる「朝5分」勉強法—この習慣で、自然と「スイッチ」が入る！ 橋本和彦
49.	「学力」と「社会力」を伸ばす脳教育（講談社+α新書） 澤口 俊之

50.	子どもをのばす「9つの性格」—エニアグラムと最良の親子関係 鈴木 秀子
51.	こんな働く母親が、子供を伸ばす! (扶桑社文庫) 松永 暢史
52.	子供に悩まされる親 親にダメにされる子供 伊藤 幸弘, 佐々木 正美
53.	赤ちゃんに読みをどう教えるか (More gentle revolution) グレン ドーマン, ジャネット ドーマン, 人間能力開発研究所, Glenn Doman, Janet Doman, 前野 律
54.	親子で楽しむベビーサイン 赤ちゃんとお手てで話そう 吉中 みちる, 吉中 まさくに
55.	家庭で無理なく楽しくできる生活・学習課題 46—自閉症の子どものための ABA 基本プログラム (学研のヒューマンケアブックス) 井上 雅彦
56.	決定版 小学生の学力を伸ばす本 別冊宝島編集部
57.	さらに IQ が高くなる小学生の右脳ドリル—1 日 5 分たった 10 問を解くだけで、右脳の働きが驚くほど良くなります! 児玉 光雄
58.	2~3 歳の右脳+左脳ドリル 市川 希
59.	忘れてなんかない ゼロシーズン—読む・書く・記憶するのが苦手になるのを少しでも防ぐために 品川 裕香, 竹田 契一
60.	魔法の 1・2・3 方式 「言い聞かせる」をやめればしつけはうまくいく トーマス・W・フェラン, 小川捷子
61.	IQ200 天才児は母親しだい!—平均 IQ159 という驚くべき「家庭保育園」の奇跡 村松 秀信, 吉木 稔朗
64.	小学 4 年生で一生が決まる キム ガンイル, キム ミョンオク, 清水 由希子
65.	いま魂の教育 石原 慎太郎
66.	0 歳から始める脳内開発—石井式漢字教育 石井 勲
67.	天才は親が作る (文春文庫) 吉井 妙子
68.	「親力」で決まる! 子供を伸ばすために親にできること 親野 智可等
69.	NEW 頭脳開発 3 歳 できるかな (多湖輝の NEW 頭脳開発) 多湖 輝
70.	子どもを幸せに導く しつけのコーチング 菅原 裕子
71.	勉強できる子のママがささやく魔法の言葉 12 才までの子の学力を高める話し方 和田 秀樹
72.	ひょっとしてうちの子って、天才?—わが子の才能を見逃さない 9 つの方法 ジュディ ガルブレイス, Judy Galbraith, 和田 秀樹
73.	3 歳までの育て方で子どもの脳は決まる! 大島 セツ子, 中島 真紀
74.	あなたの子どもはなぜ勉強しないのか Part2—15 歳を過ぎたら大家族から猫家族へ 喜多 徹人, yumura
75.	東大家庭教師の子供の頭が良くなる教え方 吉永 賢一
76.	学ぶ力を伸ばすお母さんの魔法—子どもが中学生になったら読む本 個別指導歴 20 年の塾長が教える子どものやる気を引き出す方法 谷澤 潤
77.	子どもの才能チェック BOOK—得意ジャンルが見つかる、伸ばせる (教育単行本) 野添 絹子
78.	12 歳までに「絶対学力」を育てる学習法—すべての教科に役立つ万能の思考力を伸ばす 糸山 泰造
79.	子どもをバイリンガルに育てる方法 木下 和好
80.	世界に通用する子供の育て方 (フォレスト 2545 新書) 中嶋嶺雄
81.	ふつうの家庭から生まれる犯罪者 碓井 真史
82.	赤ちゃんの知性を何倍にもするには (More gentle revolution) グレン ドーマン, ジャネット ドーマン, 人間能力開発研究所, Glenn Doman, Janet Doman, 前野 律
83.	天才児を創る! 3 歳児でも漢字がスラスラ書ける魔法のメソッド 三石 由起子
84.	「ドラゴン桜」わが子の「東大合格力」を引き出す 7 つの親力 親野 智可等
85.	子どもが勉強好きになる 50 の言葉 江藤 真規
86.	子どもを第一志望に合格させた親の 3 つの共通点 —偏差値 60 以上の高校合格率 100%! 片田舎の天才塾講師が偶然発見した 河原 利彦
87.	おさなごを発見せよ—羽仁もと子選集 羽仁 もと子
88.	「勉強が好き!」の育て方 江藤 真規
89.	収納王子コジマジックの収納&お片づけ上手な子どもに育てる! 収育のコツ (ブルーガイド・グラフィック) 収納王子コジマジック
90.	わが子を「英語のできる子」にする方法 清水 真弓
91.	ほんの少しのやさしさを (子育てシリーズ) 平井 信義
92.	お母さんは勉強を教えないで—子どもの学習にいちばん大切なこと 見尾 三保子
93.	言葉がどんどんとびでる 0 歳教育—言葉が遅いと心配な方々へ (七田式 0 歳教育シリーズ) 七田 眞
94.	子どもがグングン伸びる魔法の言葉 (祥伝社黄金文庫) 藤野良孝
95.	わが子を東大に導く勉強法—試験に負けない最強の和田式受験術 (PHP 文庫) 和田 秀樹
96.	集中力&持続力が高まる! アインシュタイン式子供の論理脳ドリル アインシュタイン研究会
97.	NEW 頭脳開発 4 歳 できるかな (多湖輝の NEW 頭脳開発) 多湖 輝
98.	脳科学おばあちゃん久保田カヨ子先生の 1~2 才 頭のいい子に育つ五感のびのび育児 —あんよが上手になったら (主婦の友生活シリーズ) 久保田 競, 久保田 カヨ子
99.	子どもに聞かせる「お金」の話—知識ゼロからの経済学 藤沢 久美
100.	家庭塾のすすめ (どの子も伸ばす学習ブックレット) 岸本 裕史, 全国家庭塾連絡会

○ 「テレビ寺子屋」における放送タイトル名と講演者名一覧（対象：2013.1.1～2014.12.31）

「パパも絵本を」安藤哲也（NPO 法人代表）	2013.01.05
「祈り」樹原涼子（作曲家・ピアニスト）	2013.01.12
「東日本大震災から学ぶこと」中田敬司（東亜大学医療学部准教授）	2013.01.19
「公平とは何か」藤原和博（杉並区立和田中学校元校長）	2013.01.26
「いざという時のために」中田敬司（東亜大学医療学部准教授）	2013.02.02
「人生のエネルギーカブ」藤原和博（杉並区立和田中学校元校長）	2013.02.09
「江戸しぐさに見るコミュニケーション」鈴木一光（児童健全育成推進財団理事長）	2013.02.16
「スピード社会の落とし穴」セルジオ越後（サッカー解説者）	2013.02.23
「脳から考える子どもの発達」鈴木一光（児童健全育成推進財団理事長）	2013.03.02
「アナログ社会を思い出そう」セルジオ越後（サッカー解説者）	2013.03.09
「アザラシのお母さんの子育て」小菅正夫（旭山動物園元園長）	2013.03.16
「幸せになるコミュニケーション」大谷由里子（人材活性プロデューサー）	2013.03.23
「オオカミの家族の絆」小菅正夫（旭山動物園元園長）	2013.03.30
「“欲しい” が元気をつくる」大谷由里子（人材活性プロデューサー）	2013.04.06
「やめなくなったらこう考える」有森裕子（オリンピック女子マラソンメダリスト）	2013.04.20
「世界のいじめ防止に学ぶ」尾木直樹（教育評論家）	2013.04.27
「すべてを力に」有森裕子（オリンピック女子マラソンメダリスト）	2013.05.04
「次世代の未来にエールを」山田パンダ（ミュージシャン・子どもサポーター）	2013.05.11
「チベットで強まった絆」バイマーヤンジン（チベット声楽家）	2013.05.18
「世代を越えて活力を」山田パンダ（ミュージシャン・子どもサポーター）	2013.05.25
「日本人から学ぶ」バイマーヤンジン（チベット声楽家）	2013.06.01
「心の荷物をおろす智恵」川村妙慶（僧侶・アナウンサー）	2013.06.08
「『つながる、よりそう』とは」東ちづる（女優）	2013.06.15
「あなたは、かけがえのない存在」川村妙慶（僧侶・アナウンサー）	2013.06.22
「私は子どもの代弁者」東ちづる（女優）	2013.06.29
「闇の中にこそ光がある」金澤泰子（書家 金澤翔子氏の母）	2013.07.06
「魂の書」金澤泰子（書家 金澤翔子氏の母）	2013.07.20
「花と蝶」矢島稔（ぐんま昆虫の森名誉園長）	2013.07.13
「虫と昆虫のあいだ」矢島稔（ぐんま昆虫の森名誉園長）	2013.07.27
「自己肯定感を育む」大豆生田啓友（玉川大学教育学部准教授）	2013.08.03
「自分を抱きしめてあげたい日に」落合恵子（作家）	2013.08.10
「自分らしい父親であるために」大豆生田啓友（玉川大学教育学部准教授）	2013.08.17
「空より高く」落合恵子（作家）	2013.08.24
「負けず嫌いを考える」田中ウルヴェ京（メンタルトレーナー）	2013.08.31
「音楽の力」湯川れい子（音楽評論家・作詞家）	2013.09.07
「成功の種を蒔くコーピング」田中ウルヴェ京（メンタルトレーナー）	2013.09.14
「音楽と生きる」湯川れい子（音楽評論家・作詞家）	2013.09.21
「家族で暮らせるありがたさ」池間哲郎（アジア支援機構代表理事）	2013.09.28
「被災地の子どもたち」長倉洋海（フォト・ジャーナリスト）	2013.10.05
「働く子どもたち」池間哲郎（アジア支援機構代表理事）	2013.10.12
「2つの家族」長倉洋海（フォト・ジャーナリスト）	2013.10.19
「カマタ式健康法」鎌田實（医師・作家）	2013.11.02
「子どもを台所に立たせよう」竹下和男（子どもが作る“弁当の日”提唱者）	2013.11.09
「いのちを守る見えない3つのシステム」鎌田實（医師・作家）	2013.11.16
「味覚が育む親子の絆」竹下和男（子どもが作る“弁当の日”提唱者）	2013.11.23
「しあわせの13粒」内藤いづみ（在宅ホスピス医）	2013.11.30
「ツナガル」クミコ（歌手）	2013.12.07
「あした野原にでてみよう」内藤いづみ（在宅ホスピス医）	2013.12.14
「サヨナラをあげる」クミコ（歌手）	2013.12.21
「アグネスのナイジェリア視察」アグネス・チャン（歌手・教育学博士）	2013.12.28
「自信を育てるコツ」白石豊（福島大学教授）	2014.01.11
「子どもは未完成がいい」親野智可等（教育評論家）	2014.01.18
「人を育てるコツ」白石豊（福島大学教授）	2014.01.25
「楽々宿題・勉強術」親野智可等（教育評論家）	2014.02.01
「感情は伝えるもの」山崎洋実（ハッピーマミープロデューサー）	2014.02.08
「これからの富士山」野口健（アルピニスト）	2014.02.15
「自分のパターンを知ろう」山崎洋実（ハッピーマミープロデューサー）	2014.02.22
「なぜ遺骨収集を始めたのか」野口健（アルピニスト）	2014.03.01

「野球がくれた出会い」奥村幸治（NPO 法人ベースボールスピリット理事長）	2014.03.08
「ヒグマの親子に学ぶ」小菅正夫（旭山動物園元園長）	2014.03.15
「人間・イチローから学ぶ」奥村幸治（NPO 法人ベースボールスピリット理事長）	2014.03.22
「群れの中で育つニホンザル」小菅正夫（旭山動物園元園長）	2014.03.29
「人間パワースポット」鈴木光司（作家）	2014.04.05
「雑談力と会話力」齋藤孝（明治大学文学部教授）	2014.04.12
「ターゲット・ロック・オン」鈴木光司（作家）	2014.04.19
「人はチームで磨かれる」齋藤孝（明治大学文学部教授）	2014.04.26
「生きてるだけで百点満点」鈴木せい子（鈴木助産院院長）	2014.05.03
「かあさんのこもりうた」こんのひとみ（絵本作家・シンガーソングライター）	2014.05.10
「生まれてきてくれてありがとう」鈴木せい子（鈴木助産院院長）	2014.05.17
「ママとパパの子育てソング」こんのひとみ（絵本作家・シンガーソングライター）	2014.05.24
「地域で子育てを」堀田力（さわやか福祉財団）	2014.05.31
「トイレと日めくり」相田一人（相田みつを美術館館長）	2014.05.31
「自分の力を地域で生かす」堀田力（さわやか福祉財団）	2014.06.21
「にんげんもの」相田一人（相田みつを美術館館長）	2014.06.28
「子どもからの贈りもの」山田パンダ（ミュージシャン・子どもサポーター）	2014.07.05
「乗り越えられない壁はない」古市佳央（オープンハートの会）	2014.07.12
「殻を破ろう」山田パンダ（ミュージシャン・子どもサポーター）	2014.07.19
「生きる意味とは」古市佳央（オープンハートの会）	2014.07.26
「息子と学ぶ」バイヤーヤンジン（チベット音楽家）	2014.08.02
「カウンセリングのすすめ」長谷川泰三（カウンセラー）	2014.08.09
「大好きな日本の歌」バイヤーヤンジン（チベット音楽家）	2014.08.16
「カウンセラーへの道のり」長谷川泰三（カウンセラー）	2014.08.23
「歯科医のいしよ話」岡崎好秀（小児歯科医）	2014.08.30
「自分で守れる子になる」坂本廣子（料理研究家）	2014.09.06
「口は子どもの履歴書」岡崎好秀（小児歯科医）	2014.09.13
「食で子どもを守る」坂本廣子（料理研究家）	2014.09.20
「本当のチームワークとは」立花龍司（コンディショニングコーチ）	2014.09.27
「大島渚と過ごした日々」小山明子（女優）	2014.10.04
「子どもを大きく伸ばすために」立花龍司（コンディショニングコーチ）	2014.10.11
「夫を見送って」小山明子（女優）	2014.10.18
「違いを楽しもう」にしゃんた（羽衣国際大学准教授）	2014.10.25
「真のスポーツ文化をつくろう」田中ウルヴェ京（メンタルトレーナー）	2014.11.01
「共に笑おう」にしゃんた（羽衣国際大学准教授）	2014.11.06
「幸せのつくり方」田中ウルヴェ京（メンタルトレーナー）	2014.11.15
「希望を持って生きる」川村妙慶（僧侶・アナウンサー）	2014.11.29
「生きているってすばらしい」鎌田實（医師・作家）	2014.12.06
「楽しくなる人間関係」川村妙慶（僧侶・アナウンサー）	2014.12.13
「鎌田流・1%の力」鎌田實（医師・作家）	2014.12.20
「分からないってなんだ」きたやまおさむ（精神科医・作詞家）	2014.12.27

○ 『プレジデント Family』における目次タイトル名一覧（対象：2006.9～2008.12）

2006/9月号	大人になって輝く家庭の教育／賢い子が育つ5つの父親授業／夏休みにぐっと伸びる子、ガクンと落ちる子
2006/10月号	「成績優秀」若手社員の親の顔／成績表ではわからない学力分析／嫁にいける娘、いけない娘
2006/11月号	頑張る人ほどつるし上げるのでは良い教師は育たない／モンダイ教師の実践的攻略法を教えます／いい大学に行ったほうが幸せになれるの？
2006/12月号	発表！「東大・京大」に入りやすい都道府県ランキング／全国のお買い得私立中学200校／近所の公立中学の学校力を診断してみよう
2007/1月号	夫の年収が1000万円あっても満足できないのはなぜなのでしょう／放任主義の夫と子育ての方針が合いません。／「親子のタイプ別」合格の勝ち取り方
2007/2月号	できる子は「一点集中力」が違う／試験日迫る！ケアレスミスをなくす問題の解き方／ゲーム「知育ソフト」大ヒット商品20
2007/3月号	東大生の進学コース別「家計の対処法」／女四十代、再就職マニュアル／私立中高一貫校は、2007年どう変わる？
2007/4月号	チャレンジテスト全77問／「目指せ！愛される父を」ダメパパ改造7日間／子供がウソをついた。叱るか、叱らないか
2007/5月号	親が手を貸すとき、子供に任せるとき／1.毎朝パン食、はいかがなものか。／「本当に必要な学力」教え

ます
2007/6月号 【国語】長文問題で点が取れない子／幾何の証明力は、文系、理系、すべての生徒の財産／小学生のうちに、英語はどこまでやればいいのか？
2007/7月号 内田伸子教授の知性もモラルも伸ばす方法／いい叱り方、悪い諭し方／「お母さん、どうして毎日イライラするの？」原因発見シート
2007/8月号 塾選びの新基準、公開！／私立と公立で塾代はいくら違う？／困った保護者7タイプの対応術
2007/9月号 脳がフル稼働する時間帯はいつか／読書感想文の書かせ方／ケガの応急処置、常識のウソ「鼻血」篇
2007/10月号 好かれるか、嫌われるかは親の言葉で決まる！／子どものホンネに迫る20分間インタビューゲーム／数学に強くなる「折り紙」遊び
2007/11月号 一流大学、一流企業を目指す親子に8つの注意点／業界トップ企業に入れる専門学校があった／「学校が自慢」な市町村の税金の使い方
2007/12月号 記憶力から活用力へ。基礎学力の定義が変わる／全国のお買い得私立中学200校／公立中高一貫の死角
2008/1月号 考える子が育つ贈り物100／入試に出やすい、小説を見つけた！
2008/2月号 すぐに弱音を吐く子が伸びた！／集中力を途切らせない問題の解き方／若夫婦よ、これが本当の親孝行だ／郷里の父母も感動シニア世代が心から喜ぶ贈り物／2013年に激変か高校入試の未来予想図／風邪ウイルスを100%撃退する法
2008/3月号 拝見！教育費に強い家計簿／親の決めゼリフ／泣いて笑って激怒した山本一力、息子の合格発表
2008/4月号 頭のいい子の本棚拝見！／立案！子供を一人前にする旅行計画／中学入学準備で見落としがちなこと
2008/5月号 お金持ちになる新・学歴ガイド／信じていいの？塾講師の言葉／超難関中学に合格した親子の顔2008
2008/6月号 親子の「困った！」すべて解決70問
2008/7月号 診断！わが子の心の成長度／公開！隣の家の夫婦ゲンカ／子供が自立する10歳の海外留学
2008/8月号 賢い親のマナー教育／発表！「大学センター試験」本当の実力校／父と子で行く世界遺産の旅
2008/9月号 夏休み、「勉強好き」に大変身！／家庭でなくせる体育のコンプレックス／
2008/10月号 母の叱り方、父の叱り方／学者が唸った自由研究の傑作
2008/11月号 日本一やさしい算数の授業／子供の歯、目、皮膚にいい習慣
2008/12月号 秀才の脳、わが子の脳／子供の疑問が氷解08年ニュース解説／今年の秋は、親子で「ピカソ」入門

○ 大阪市立図書館における蔵書書名（カテゴリ「家庭教育」100件／4584件：出版年月逆順2014.8以前）一覧

1. 小学生の学力を上げる秋田県式「勉強のルール」-親子でできる「家庭学習ノート」活用術-(パパ!ママ!教えて!) 菅原 敏 メイツ出版 2014.8
2. 母親の責務・子どもの成長を願うとき大切なこと-(ファミリー新書 004) 三石 由起子 廣済堂出版 2014.8
3. しっかりとすむ子育てのヒント・ママも子どもも悪くない! 高山 恵子 学研教育出版 2014.7
4. 女の子をラクに育てる本(別冊宝島 2205) 宝島社 2014.7
5. もう怒らない子育て・〈タイプ別〉子どものコーチング-若松 亜紀/著 PHP エディターズ・グループ 2014.7
6. 中学受験は親が9割 西村 則康 青春出版社 2014.7
7. お母さん、ガミガミ言わないで!子どもが勉強のやる気をなくす言葉66 曾田 照子 学研パブリッシング 2014.7
8. 子どものお片づけ・ひと声かければ5分で片づく! 橋口 真樹子 青月社 2014.7
9. 大丈夫大丈夫!子どもはぐんぐん伸びていきます・子ども自身が真の力を獲得するために、発想を変えて楽しむ子育て・一色 由利子 東京図書出版 2014.7
10. マンガでわかる魔法のほめ方PT・叱らずに子どもを変える最強メソッド 横山 浩之 小学館 2014.7
11. 90%は眠ったままの学力を呼び覚ます育て方・子どもをみんな医学部に入れたシングルマザーによる60の極意 黒田 紫 風鳴舎 2014.7
12. わが子が合格するために親ができること、してはいけないこと・現役合格率98%の秘密-阿部 泰志 現代書林 2014.7
13. 思春期の子とのコミュニケーションに悩んだら読む本・親だからできること・してはいけないこと・大塚 隆司 大和出版 2014.7
14. 算数力は「あたま計算」でグングン伸びる! 原 暁介 すばる舎 2014.7
15. 高濱流わが子に勉強ぐせをつける親の習慣37・お母さんがちょっと変われば、子どもは自分で勉強しだす! 高濱 正伸 永岡書店 2014.7
16. 子育てのためのアドラー心理学入門・どうすれば子どもとよい関係を築けるのか 岸見 一郎 アルテ 2014.7
17. 一生使える「算数力」は親が教えない。マルコ社/編集 マルコ社 2014.7
18. 知育おもちゃのつくり方&あそび方・勉強に困らない子に育てる・椎名 寛依 パブラボ 2014.7
19. 気持ちのコントロールが苦手な子への切りかえことば26・折れない心を育てることばかけ 湯汲 英史 鈴木出版 2014.7
20. 親の「その一言」がわが子の将来を決める・学歴どまりの残念な子か、学びが自立につながる子か・幼・小学生 篇 マデリーン・レヴィン 新潮社 2014.7
21. 親の「その一言」がわが子の将来を決める・学歴どまりの残念な子か、学びが自立につながる子か・中・高校生 篇 マデリーン・レヴィン 新潮社 2014.7

22.	子育てが変わる!男の子のほめ方・しかり方・お母さん次第でぐんぐん伸びる!(メイツ出版のマミーズブック) きくち美由紀 メイツ出版 2014.6
23.	男の子の一生が決まる、たった6つの心の習慣・「生きる力」を育む10歳までの育て方・山村 裕志 学研パブリッシング 2014.6
24.	あなたの子どもを優秀な子に育てるための30の法則・天才脳は5歳までに決まる・日比野 佐和子 主婦の友社 2014.6
25.	子どもの性格はたった3カ月で変えられる 梅村 秀齡 ロングセラーズ 2014.6
26.	愛され輝く力をはぐくむ女の子の育て方・幸せを願うパパ・ママの子育て(メイツ出版のマミーズブック) 大塚 隆司 メイツ出版 2014.6
27.	子どもの瞳が輝くために・母親視線の子育て論・小山田 治子 カナリア書房 2014.6
28.	「自分でやる」と言える子に育てる本・0~6歳は“ほどよく”手をかける・竹内 エリカ カンゼン 2014.6
29.	尾木ママの子どもを伸ばす言葉、ダメにする言葉(成美文庫 お・10-1) 尾木 直樹 成美堂出版 2014.6
30.	「話を聞ける子」が育つママのひと言(青春文庫 ほ・9) 星 一郎 青春出版社 2014.6
31.	「センスのいい子」の育て方 宮崎 祥子 双葉社 2014.6
32.	AERA with Baby・0歳からの子育てバイブル・遊び編 特集3歳までの好奇心はこう育つ(アエラムック) 朝日新聞出版 2014.6
33.	子育ての悩みが一瞬でなくなる本・子どもの困った行動には理由がある! 本田 千織 リベラル社 2014.6
34.	子どもを伸ばす「いいね!」の言葉「ダメ!」な言葉 河村 都 講談社 2014.6
35.	今、親ができるとても大切なこと。・親子関係をよくするストローク育児・野間 和子 合同出版 2014.6
36.	[雑誌][巻号] 社会教育 2014・5 / 第69巻 5号 / No.815 地域で子どもを支える仕組み 日本青年館
37.	花咲く日を楽しみに・子育ての悩みが消える32の答え(Como子育てBOOKS) 佐々木 正美 主婦の友社 2014.5
38.	この「魔法のメガネ」で、子どもの心が見えてくる・10歳までの子育てがもっと楽になる81のQ&A・七田 厚 学研パブリッシング 2014.5
39.	「算数が得意な子」にするために親ができること・ジュニア算数オリンピック金メダリストの母親が教える「おもしろ算数教育」のススメ・和田 聖子 ばる出版 2014.5
40.	夜回り先生子育てで一番大切なこと 水谷 修 海竜社 2014.5
41.	生きる力ってなんですか? おおた としまさ 日経 BP 社 2014.5
42.	子どもの心のコーチング・イラスト版・菅原 裕子 PHP 研究所 2014.5
43.	お母さん次第でぐんぐん伸びる!男の子の育て方・「自立力」をのばすママの子育て(マミーズブック) 小屋野 恵 メイツ出版 2014.5
44.	武道の教えでいい子が育つ!・スウェーデン人空手家ウルリカの子育てメソッド・柚井 ウルリカ 講談社 2014.5
45.	母の道をまっすぐに歩く 浜 文子 小学館 2014.5
46.	「メシが食える大人」に育つ子どもの習慣 高濱 正伸 KADOKAWA 2014.5
47.	40代からの成功哲学 青木 仁志 アチーブメント出版 2014.5
48.	子どもへの「怒り」を上手にコントロールできる本・怒ってばかりの毎日が変わる! 榎本 博明 PHP 研究所 2014.5
49.	「育てにくい子」に不安を感じたときの子育て 小川 圭子 PHP 研究所 2014.5
50.	誰も教えてくれなかった正しい子どもの育て方・How to be happy with your children・藍 ひろ子 主婦の友社 2014.4
51.	運動神経のいい子に育てる本(別冊宝島 2154) 宝島社 2014.4
52.	子どもの「言わないとやらない!」がなくなる本・自分で決め、自分からやる心を育てるちょっとした方法・田嶋 英子 青春出版社 2014.4
53.	尾木ママの10代の子をもつ親に伝えたいこと(PHP文庫 お67-3) 尾木 直樹 PHP 研究所 2014.4
54.	女の子って、勉強で人生が変わるんだ!・女の子の学力を伸ばすには、女の子に効果的な勉強法がある! 中井 俊巳 学研教育出版 2014.4
55.	子にかけろ×子にかけない・「人創り」日本一の学習塾・柴山 健太郎 海拓舎出版 2014.4
56.	算数ができる子になる魔法のことば(SB文庫 オ4-1) 親野 智可等 SBクリエイティブ 2014.4
57.	親子で読むケータイ依存脱出法 磯村 毅 ディスカヴァー・トゥエンティワン 2014.4
58.	時間という贈りもの・フランスの子育て・飛幡 祐規 新潮社 2014.4
59.	子どもが変わる食卓の魔法 本物のつよさ、たくましが育つ(PHPのびのび子育て 2014年6月 特別増刊号) PHP 研究所 2014.4
60.	女の子は8歳になったら育て方を変えなさい!・やさしく賢い女の子に育てる母のコツ・松永 暢史 大和書房 2014.3
61.	子どもの学力がグングン伸びる「朝5分」勉強法・この習慣で、自然と“スイッチ”が入る! 橋本 和彦 大和出版 2014.3
62.	あなたの“可能性の種”を咲かせましょう!・泣き虫だった主婦が2万人を行動させた“キセキ”の魔法・辻中 公 ごま書房新社 2014.3
63.	なぜ受験勉強は人生に役立つのか(祥伝社新書 360) 齋藤 孝 祥伝社 2014.3
64.	今、なぜ、勉強するのか?・これがわかれば、子どもは進んで机に向かう! 松永 暢史 扶桑社 2014.3
65.	社会的養護・新版(新保育ライブラリ) 櫻井 慶一 北大路書房 2014.3
66.	母たちのプロ野球 前田 恵 中央公論新社 2014.3

67.	子どもが本当の幸せをつかむ魔法のババ・ママコーチング・無限の可能性を引き出す10のカギ・小山 英樹 PHP 研究所 2014.3
68.	どうか忘れないでください、子どものことを。佐々木 正美 ポプラ社 2014.3
69.	女の子って、ちょっとむずかしい?・いま、知っておきたい5つの成長ステップ・4つのリスク・スティーヴ・ビダルフ 草思社 2014.3
70.	子どもの「英語脳」の育て方・わが子が一生、英語で困らない!・船津 洋 現代書林 2014.3
71.	わが子のスマホ・LINEデビュー安心安全ガイド 小林 直樹 日経 BP 社 2014.3
72.	イライラしない子育ての本・怒らずに子どもを伸ばすコーチング・川井 道子 大和書房 2014.3
73.	浅利妙峰の母になるとき読む本 浅利 妙峰 致知出版社 2014.3
74.	子どもを理科系に育てるには?・理科系アタマは親がつくる・(WIDE SHINSHO 207) 和田 秀樹 新講社 2014.3
75.	10歳までに身につけたい子どもの続ける力 石田 淳 かんき出版 2014.3
76.	子どもに体験させたい20のこと・想像力を限りなく刺激する!・佐藤 悦子 筑摩書房 2014.3
77.	叱るより聞くでうまくいく子どもの心のコーチング・0歳から6歳までの・和久田 ミカ KADOKAWA 2014.3
78.	子どもの学力がぐんぐん伸びるお母さんと一緒に読解力教室 二瓶 弘行 新潮社 2014.3
79.	教育改革のゆくえ・家庭は子どもの教育の原点 続・中田 雅敏 新典社 2014.3
80.	小学生からの子育てバイブル・6年間で大切なことがわかる学力しつけ子どもの心・2014(アエラムック) 朝日新聞出版 2014.2
81.	こくごだいすき 別 おかあさん学校 江口 季好 日本図書センター 2014.2
82.	頭のいい子をつくる夫婦の戦略・決定版・「9歳」「12歳」までにこれをやれば成功する・清水 克彦 学研パブリッシング 2014.2
83.	ひとりっ子をうまく育てる本(別冊宝島 2132) 宝島社 2014.2
84.	算数と国語を同時に伸ばす方法 宮本 哲也 小学館 2014.2
85.	子どもの「自信」と「やる気」をぐんぐん引き出す本 原田 綾子 マイナビ 2014.2
86.	「叱らない」育て方・「自分からやる子」に変わる7つの方法・(PHP 文庫 い 86・1) 池上 正 PHP 研究所 2014.2
87.	お母さんは勉強を教えないで(PHP 文庫 み 46・1) 見尾 三保子 PHP 研究所 2014.2
88.	思春期の子に、本当に手を焼いたときの処方箋 33(小学館新書 185) 土井 高德 小学館 2014.2
89.	誰も気づかなかった100%合格のための超勉強法 河原 利彦 現代書林 2014.2
90.	生き抜く力をつけるお母さんのほめ方・叱り方 高濱 正伸 小学館 2014.2
91.	くまモンのお行儀 BOOK・正しいマナーを身につけよう! 日本文芸社 日本文芸社 2014.2
92.	キッズニア流!体験のすすめ・子どもがやる気になる31のヒント・住谷 栄之資 ポプラ社 2014.2
93.	親と子で学ぶ算数入門・数と計算のしくみから関数の初歩まで 遠山 啓 SBクリエイティブ 2014.2
94.	赤ちゃんからのシュタイナー教育・新版・親だからできる・ラヒマ・ボールドウィン・ダンシー 学陽書房 2014.2
95.	やさしいママになりたい!・ギノット先生の子育て講座・アデル・フェイバ 筑摩書房 2014.2
96.	バイリンガルは「茶の間」で育つ!・どの子も英語が話せる!ディズニー大好きキッズ8つの法則・ロバート・A.パーカー プレジデント社 2014.2
97.	男の子の育て方 2014年版 打たれ強くなる、自信がつく(PHPのびのび子育て 2014年3月 特別増刊号) PHP 研究所 2014.1
98.	ほめ力・子どもをその気にさせるプロになる! 柳沢 幸雄 主婦と生活社 2014.1
99.	子どもが勉強好きになる子育て(Forest 2545 Shinsyo 097) 篠原 菊紀 フォレスト出版 2014.1
100.	「ゆっくり育てる」と、子どもは伸びる!(PHP 文庫 た 29・13) 多湖 輝 PHP 研究所 2014.1

謝 辞

本論文を作成するにあたり、指導教官である須田康之先生に多くのご助言とご指導をいただきました。ここに記し、厚く御礼申し上げます。テーマの絞込みに始まり、研究方法や考え方などさまざまな角度からのご指摘をたまわり、このような形で論文にまとめることができました。

また、教育コミュニケーションコースの諸先生方そして須田ゼミ諸兄姉の皆様から貴重なアドバイスを多く頂戴し、本研究を成し遂げることができました。感謝の念にたえません。

本当にありがとうございました。

2017年2月17日

小林 文英